

隠していた日記が親友
にバレた

送検

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

1つの名刺とプロデューサーの言葉に『たわいのない夢』を思い出した少女と、花菖蒲に憧れる少女の『背中を押す』男の子のコメディ。

日記から始まる恋だっただろう、ってお話。

目次

ぶろろーぐ	1
藤の花言葉	33
出会いと繋がり	79

ぷろろーぐ

11月12日 天気 晴れ

今日は非常に天気が良い。

晴れ間は見え、風もどことなく穏やかで、体感的にも悪い日ではない。

しかし、特にこれといった用事もないため、今日は俺がとある女の子と出会った話をしようと思う。

もう、7年前になるかな。

小学3年生の頃、地元の東京を離れて俺は石川にやってきた。

親からしたら、石川の世界はさぞ楽しかったことだろう。特にサッカー好きな父は、早速鼻根のサッカーチームを一生懸命応援してて楽しそうだった。

しかし、当時の俺からしたらたまたまもんじゃない。

その土地のことを全く知らず、ましてや日本地図の暗記テストで一番最後に覚えたであろう単語しか知らない俺にとっては、石川は恐怖以外の何者でもなかったのだから。

知らないものだらけだったのだ。

人間、無知は恐怖を感じるもの。

見知らぬ土地、喋られる方弁、質問攻めする友達。

悪意のない沢山の初めては、俺の心を恐怖に染め上げたんだ。

ある日、俺は学校をポイコツトしようとはある公園で蹲っていた。

小学3年生。

これから2桁の年になるであろう俺からしたらなんとも情けないと思ってしまう話
だけど、当時の俺はそれだけ石川に恐怖を感じていた。

学校に行きたくなかった。

怖かった。

けど、学校を辞めてしまえるほどの蛮勇は当時の俺にはないし、一人で暮らせるだけ
の力もない。

無いものばかりの俺はこういった形で抵抗の意を見せて『欲しいものを強請ること』
しか出来ない情けない少年だったのだ。

近くの公園は、緑がたくさんあるが子供もそれなりに多く、普段は落ち着かない。

けれども、早朝。人っ子一人いないあの風景は当時の俺からしたらまだマシな光景

だった。

住み始めた一軒家も、新築の匂いが消えない故に落ち着かず眠ることが出来ない。

その中で物静かな雰囲気先行するこの公園は幾分か楽だった。

誰に気を遣う必要も無い。ここなら想いを吐き出せると、そう思ったんだ。

一睡もままならぬ状況で、俺は公園のベンチで泣いていた。

様々な想いが入り乱れていた。

勿論、故郷に対する想いも。

学校をボイコットした親に対しての申し訳なさも。

だからといって学校には行きたくない、そんな身勝手な我儘にも似たなんとも言えな

い気持ちも。

兎に角、色々な感情が混ざって今の俺が引くくらい泣いていたのはどうしようもない

事実。

俺は、当時は振り返りなんとも情けないことをしたのだなと心の底からあの時のことを後悔している。

けど、それがなければ俺は一生この街に馴染むことが出来なかったと考えると少し複雑な気持ちもある。

あの時、公園のベンチで泣いていた俺を心配してくれたあの子がいたから、俺は変わ

ることが出来た。

出会えなかったら一生変われなかった。そんな自覚が一入にある。

ターニングポイント、だったんだ。

それについて、少しだけ書こうと思う。

公園内、ベンチ。

そこで俺は延々と泣き続けていた。

理由は、さつきも言った通り色んな感情が混濁していたから。

そんな情けない理由で涙を流していた俺の頭に影が落ちた。日が差していた場所が暗くなる。

その一連の流れに釣られた俺は、思わず涙を流したまま、上を向いた。

すると、そこに居たのは1人の女の子。

姿はぼやけて分からなかったが、聴覚は正常に働いているため、少女が発した言葉はしやんと覚えている。

『この街が、怖いですか？』

そう言った少女の髪は長くて、瑠璃色にも似た髪色をしていた。

上品そうな服。長袖のワンピースを着た少女はこの公園の風景とは浮世離れた存在のよう。

その姿に、思わず俺は涙が止まった。泣くための涙を失ったやも分からぬ。兎に角、涙が止まった。

滲んだ涙が乾き、視界が鮮明になると次第に見え始めたのは少女の顔立ち。

何処かすましたクールな顔をしているものの、身体はこんな人気のないところで泣き崩れている俺を心配するかのように手を伸ばす。

輪郭がはつきり見えたのと同時に、頭の思考回路も少しずつ明瞭になる。

ひとまず考えたのは謝罪。

こんなところで涙を流していたら誰だって煩わしいと思うだろう。恐らく、少女も例に漏れない。

だからこそ、少女はこちらに来たのだろう。

心配した風体を装い、遠回しに『迷惑をかけるな』と言っているのだろうと当時の俺はなんともいえないマイナス思考で物事を見ていた。

故に、俺は立ち上がり歩き出す。

心配ないということを身体で証明する為だ。

しかし、少女は関わることを止めない。

『待ってください』

グズグズ泣いているのを見られたくなくて、右手で目を拭っていると左の手首を掴ま

れ、動きを止められる。

そこそこの力だ。

抵抗もしなかった俺はそのまま引つ張られ、ベンチに座らされる。

『まだ質問に答えてません。人が心配しているのです、訳くらい話したら如何でしょうか』

ベンチに座り込んで俯いていること数秒。

女の子が俺に言葉を投げかけた。

小難しい言葉を話す子だな、というのが第2印象だった。お嬢様語と言えば良いのだろうか。上品な言葉を喋る女の子は、俺に質問の返答を促す。

女の子と俺は見知らぬ仲。

失礼にも女の子の言葉を恫喝のようにも感じた俺は、それでこの子と関わる事がなくなるならと、俺はありのままに理由を話した。

この街にいる前に遠くの街にいたこと。

その街にいれないことが寂しいこと。

ここはちよつとばかり怖い街だということ。

そして——この街のことを何も知らないこと。

俺は目の前の少女に赤裸々に語った。

笑われるだろう、と思った。

けど、その女の子は俺を笑うことなく俺を見たんだ。

毅然とした立ち振る舞いで。

けれど、泣き疲れ座る俺を見下ろすこともなく、しやがみこみ、あくまで同じ視線の低さで俺の目を見据えた。

『見知らぬ土地は、怖いものです。それを恥じることはありません。けど、少しずつ順応していけば。きつとこの街は楽しく思えて仕方なくなると思います。』

だから、安心してください。己が心を閉ざさなければ、きつとその気持ちに皆様は応えてくれます』

俺は、その時の女の子の言葉を今でも鮮明に覚えている。

その時の全文をママで書くともれなく日記帳が1日分の日記だけで果てるので要約はするけど、その時の女の子の言葉のひとつひとつは俺の心に刺さった。

けど、刺すだけじゃない。

恐怖でいっぱいだった俺の心を癒してくれた。

ひとつ先の世界に飛び込む勇気をくれた。

とある絵本に出てくる魔女のような、何かを代償にして何かを与える存在とはまた違う。

無償の優しさに、俺の心は揺り動かされたんだ。

あの時のこと、有耶無耶にされてお礼は今も言えてないけど、はつきりとこれだけは書きたい。

キミのお陰で今の僕がいます。

キミのお陰で人と関わる人並みの生活が出来ます。

ありがとう、と。

後、もうひとつ。

好きですツ!!

思えば一目惚れだったのかもしれないし、もしかしたらあの1件をきっかけにして友達になってから彼女の人となり惚れたってのもあるかもしれない。

どちらにせよ、俺は彼女のことを好いてしまっている。それも、ライクじゃなくて、ラ

ブの方だ！断言したっていいね、いや……絶対にする！

ていうか、最近また可愛くなったよな。

ちよつと前まで髪はロングヘアのままだったのにも関わらず水引細工のアクセサリとか、しつぽ留めにリボンとか付け始めて一層可愛くなったように見える。

顔立ちだつてより聡明になったし、怒つてツンツンしている時も、和スイーツを食べる顔が和む……ほわぁーつてしてる時も全部可愛い。

つむマジで天使。

言ったら怒られるから、文面で書くのみに留めておくとしよう。

何より、こんな俺に話しかけてくれることが一番嬉しかった。

俺がここで孤立しなかったのって、こうして健やかに過ごせてるのって、本当にあの子の影響が多いから、これ本当に。

他人に優しく、自分に厳しく。

けど、他人の妥協や甘言にも毅然と接する。

そんな気高い心に惚れたんだよ……。

はぁ……好き!!本当に好きツ!!

尚、ここに書き連ねたことは紛れもない俺の本心であるが、決して彼女にはバレないように日記の1番後ろに記しておくことにする。

バレたら死ぬから。

社会的にも、身体的にも、精神的にも死ぬから。

まあ、100万歩譲ってあの白石がだぞ？

万が一にもこの家の、ましてや汗臭い男の俺の部屋に来るなんてこたアないだろうし？

多分大丈夫だよな！はっはっは！

※

「……あの」

「はい」

「何でここに来ていらっしゃるんですか？」

「貴方のお母様に見つかり、家に寄ってきなさいと言われたもので」

「うせやろ」

明くる日の午後。

学生は部活がない限り、家に帰宅する為に歩を進めるであろう夕方。

1つの一軒家の一部屋であるところの、己の自室へと辿り着いた男は何故か正座をして、目の前の女の子を見つめていた。

夢ならば、どれ程良かったのだろう。

そんな一言が男の頭を過ぎった途端、こほんと咳払いをする音が聞こえる。

声の主は、男の目の前に正座で座る女の子。

瑠璃色——されど光を当ててしまえば儂く消えてしまいそうな色をしたロングヘア。そんな髪のをリボンで纏めている少女が、『1つのノート』を自身と男の間に置いて、男を見つめる。

「話があります」

「……はい」

「この日記は、一体なんなのでしょう」

日記帳。

それは、人によって書く人と書かない人に別れるもの。

日記を書く習慣自体に悪いことはなく、寧ろそれは良い部類に入るであろう習慣を続けるのに必要不可欠なもの、それが日記帳だ。

書くことは良い習慣。そんな日記帳で、何故男は女の子にお話もとい説教をされているのか。

それは無論、日記の内容であつた。

男は、今時の少年にしては珍しく日記を書く習慣が身に染み付いていた。

一日一善、日記を書かなければ気分すらも悪くなり、精彩を欠く程の日記ジャンキー。そんな少年の書く文字は丁寧な、そして分かりやすい筆圧で綴られている。

しかし、今回はそれが災いした。

日記なのだから自分の分かりやすいようにすれば良いものの、他人にも分かりやすく書くことで日記の内容がバレてしまう。

今の男の羞恥心は、MAXに近い状態であった。

例えるならばギャルゲーを購入したことがクラスメイトにバレた男の子の羞恥心と近い状態。

そんな状態で、真っ赤になった顔を俯かせた状態で男はポツリと呟く。

耳が赤いのは、勿論女にバレている。

「ご覧の通り、日記でございます」

「……そうですね、日記です」

ツ——と言葉苦しげに男は目の前の女の子を睨みつける。それなりの眼光と鋭さから発せられる睨みは男の端正な顔立ちも相まってそれなりに怖い部類に入るのだが、残念ながら女の子には鋭い眼光が通用しない。

そんな目付きをされた所でこの男が何もしないヘタレだということを知っているからだ。

「不躰ながら、部屋の中を拝見させて頂きました。私が思っていたよりも綺麗でしたね」
「本っ当に不躰だよな。なあ、頼むからそろそろ部屋から出てよ、俺を許してよ……」

「話は変わりますが」

目の前の女の子と二人きりになった時、決まって呼ぶ名前を呼ぼうとした男の言葉は見事に遮られる。

追撃も、口撃も、反撃さえも許されない。

まさに四面楚歌、A B C D包囲網。

男の頭の中では牛さんが今まさに運ばれるような、そんな歌が流れていた。

「机に1つの冊子を見つけた時、知的好奇心が湧きました。普段、明朗快活な貴方がどんなことを書いているのか、興味が湧いたのです」

「湧かせてくれるなよ」

男が諦め、天井のシミを数え始めると不意に女の子が身体を少し動かし、挙動不審な様子を見せる。

その様子に、天井のシミを数えることをすっかり忘れた男は、その様子を興味深げにじっと見つめる。

頬の赤みは、幾分か緩和していた。

その一方で女の子は気が気でない。

日記に書かれていたこととはいえ、思いの丈をかました男のノートを拝見し、あまつさえ自分のことを書かれている内容を運悪く見てしまった。

女の子にとって、過去の話を感謝されるということは決して忌避すべきものではない。ましてや、好意を寄せられていることも悪い気はしない。それが友人であるのなら、尚更嬉しいものだ。

しかし、女の子にとって、男のノートは些か直球が過ぎた。

まさか、このような形で男の秘めたる想いを知ることになるとは想いもよらなかつたし、そもそもこういったことをノートに書かれていることすらも女の子は知らなかつた。

結果、女の子の頭の中には様々な思惑が入り乱れている。嬉しい反面、本当なのか疑わしい猜疑心、そして、目の前の男の本心を知ろうとする探究心。

女の子は、自己評価がかなり低い部類に入る。

故に、この男が本当に日記に書かれていた女の子のことを可愛く思っているのか、好んでいるのか。本人の口から聴かねば、信用が出来なかつたのだ。

「……この日記に書いてあることは、真実なのですか？」

躊躇いながらも、女の子——白石紬が遂に質問の核心を突く発言をすると、男は少しだけ俯きほつりと一言。

「……はこ」

その言葉の、何たる重いことか。

その言葉の重みを改めて感じた男——藤宮公輔は大きく項垂れる。

しかし、項垂れたところで大きく状況が変わることもない。現時点の、日記を読まれているという修羅場を回避することは出来ないのだ。

公輔は内心で白目を剥く。

高校2年生の華やかな生活。

そして、鮮やかなるデビュー。

それらを目論んでいた公輔が見事にデビューの準備を済ませ意気揚々と家に帰り、部屋へ突入すればいつの間にか顔を赤らめ、身体をふるふるさせていた制服姿の女の子がいたのだから。

「……………気持ち悪かったよな」

「え……………」

公輔がぼつりと発した一言に紬は反応する。

しかし、発されたのはたった1文字の感嘆句のみ。その感嘆句に便乗するかのよう
に、公輔は堰を切るように言葉を並べる。

「その日記、俺の誠が書かれているんだ。普段、俺ってば紬に、感謝とか素直に伝えられてなかったから……………だから、日記だけでも良いから留めときたくて」

洋式の部屋、フロアタイルになっっている公輔の部屋で正座をするのはナンセンスだろ

う。

しかし、この空間では誰一人としてそんなことを気にしてなどいない。

『日記帳』と『藤宮公輔』。そう書かれたノートの中身に比べれば、正座する場所など些細なものであった。

「公輔……」

静寂の中、紬が公輔の名前を口にする。

その言葉に、紬を真つ直ぐな瞳で見つめていた公輔は縦に頷き、紬の返答を待つ。

やがて、紬が前を見た。

その瞬間、不思議と鳥達の囀りや物音がしんと静まり、静寂のみが紬と公輔を包み込む。

そうなる、何より先に聞こえてくるのは呼吸音と、空気を介して聴こえてくる声。

その声を発するために、紬は息を吸い込んだ——

「そう言つて、本音はどうなんですか？」

「キミのことが好きになりました」

紬の頭の中で、何かが切れた音がした。

この男はどうしてこうも歯が浮く台詞をいけしやあしやあと言えるのか。

そんな想いに駆られ、嬉しい反面何処か冷静な己も心から染み出て、結果紬は顔を顰

め公輔を睨み付けた。

「近頃はついたーというものが流行っているらしいのですが」

「ねえ待って、紬さんってば。それ誘導尋問って言うんだよ？年端のいかない男の子にそんなことして楽しい？」

「楽しいです」

「おかーさん助けてー!!ここにドMホイホイな幼馴染がいるよー!!」

男には引いてはならぬ時がある。

公輔は、己が不利を自覚する前に立ち上がり——正座をしていたことにより足が生まれたての子鹿になっていたことも失念して、思いつきり倒れ込み紬に白い目を向けられること数秒、再度立ち上がり、今度は自らの机からノートをひったくる。

「おうおう、紬さんや。お前がそこまで俺のことを辱めるんなら俺にだってやり方があるんだぜ?」

「例えば、その方策とは?」

「ノートを燃やす……ノート焼却祭りだ!」

公輔が、今まで纏めあげた日記帳『10冊相当』を携え、部屋を出ようとドアを開く。しかし、そんな反抗も束の間。

服を引っ張られる時特有の圧迫感に気がつき、後ろを向くと、後ろには人差し指と親

指で公輔の学ランを引つ張っている紬の姿があつた。

「その手を離さないか、紬」

「それは困ります」

「なんでやねん」

「全力で止めさせて頂きます」

「だからさ！なんでつて言つてんじゃん!!」

紬の阻止に、思わず公輔は突つ込む。

白石紬という女の子はふとした拍子に狼狽する時以外は用心深く、疑り深く、事の順序を追つて説明できる冷静さを持ち合わせている、そういうことが出来る女の子であつた。

それがちよつと瓦解すると、彼女の素である金沢弁と共に可愛らしい紬が現れるのだが、それは今のこの状況においては何ら関係のない話である。

公輔は大きなため息を吐く。

それに反応した紬は、その態度に顔を顰めて公輔を見遣る。

「……何でしょう。人前のため息なんて、不躰な」

「いやさ、何で紬は俺のノートをそんな大切にしているのかなつて思つて」

「……逆に問いますが、私にそのノートの中身が明け透けになった程度のこと貴方

はノートを焼却するのですか？」

「いや、だつて恥ずかしいもん」

「恥ずかしい……？？？そうですか、貴方はその程度の気持ちで私の事を文面で好き等と……」

「ああもう大好きだよツ!!このノートでちゃんとした気持ち伝わんなら大切に保管してやろうじゃねえかゴラア!!」

公輔の焼却の意思、数秒でブレる。

紬が疑り深く言葉を探る際の口喧嘩に公輔は1度として勝利したことがない。

それを察してか、公輔は大声で先程の言葉を訂正する。

恥ずかしくない、寧ろ大好きだという証明である。

1番ブレてはいけない大切な気持ちは今も公輔の中で芯となり、一筋の幹となつてい
る。

それは、目の前のおよそ25センチ程の近さにまで肉薄しているこの女の子のことが
好きという気持ち。

秘めた想いは、まさかのお家突入からの部屋のガサ入れでバレてしまったが、その所
在がバレようがバレまいが根本の気持ちは変わらない。

ノートを見つげられたくらいで諦められる『恋』なら、とつくのとうに冷めてるだろう。

それが冷めないということは、つまりそういうことだった。

「……公輔の悪癖はそういう所です。うちにそういうものを見られた所で何ら恥ずかしがることはありません、思い込みで物事を全て決め込むのはいい加減止めて下さい」

「……自分だって時々突拍子もないこと言う癖に」

「何か言いましたか」

「何もありません」

「……大体、私が何故このノートを燃やすことをここまで阻止しようとしているのか、貴方は分かかっておられるのですか？」

その言葉に、公輔は『うぐ』と言葉に詰まるものの今度はニヤリと不敵な笑みを見せる。

打開策を見出したのか、若しくは仕返しか。

公輔が不敵な笑みを見せたまま、口を開いた。

「わっかんねえなあ」

「……今、何と？」

「分からないって言ってるんよ。確かに俺は紬を白石と呼んでいた頃から、時々友人に

口を滑らせてつむと呼んで足を踏まれている現在までの紬を知ってる。けど、世の中ままならないこともあれば、分からないこともある……理解できるだろ、つむつむ」

「悪寒が走るような愛称で私を呼ぶのは即刻辞めてください。貴方はそう言いますが、今まで私を散々と言っているほどに辱めてきました。その減らず口と頭の回転を使えば私の考えなどお見通しでしょう？」

紬が捲し立てるものの、公輔はこれ以上取り合うこともなくニヤリと笑みを見せる。

その笑みに、質問した自身の敗北を悟った紬はせめてもの反抗として目を細め、公輔を睨みつけた。

「……本当に、そんなことも分からないのですか？」

「紬の口から聴きたい、確証が持てない」

真剣な眼差しを向ける公輔のその一言を紬は予期していた。

公輔は意地の悪い人間であるということを紬は知っている。故に、今の今までの仕返しとしてこのようなことをしてくるといふのは大体分かっていたのだ。

紬は公輔の目を見る。

これから先、言うであろう発言に真摯になるため。

少しだけ頬を染めた彼女は、『なんなん……』と心の中で悪態を吐きつつ、公輔に対して言葉を紡いだ。

「……百歩譲って私のことを大切に思っているのなら、その思い出を燃やすなんて浅慮な考えを持たないでくださいと言っているのです」

紬の心の中で羞恥心は一入にあった。

けれど、公輔の日記を不可抗力ながら眺め、その内容を知ってしまった以上自分の気持ちを隠すのも卑怯だと感じた故に、紬は勇気を振り絞り己の羞恥心を押し込んだ。

「……紬」

「？」

「好きです」

「ツイスタの開設方法を教えてください」

「ネエ、ナンデ？ツイスタナンデ？」

「鍵アカにさせて頂きます」

「おいおい物騒だな、頼むから正気に戻れ？なあ、お願いだから鍵アカはやめてよね……つむつむ」

「ツ……！ですからその名前のうちを呼ぶのはやめると何度も……!!」

「じゃあなんて呼べば良いのさ、また白石とでも呼べば……」

「だらくさい!!」

「ははっ、またまたそんなこと言っちゃって……で、本音は？」

「だらっ!!」

「ふあっ」

唐突の金沢弁に公輔は後ずさり、壁にもたれ掛かり、それと同時に壁から崩れ落ちる。紬の気迫に押された形だ。

先程から公輔の手はガクガク震えており、顔も驚愕といった様相。

今、目の前で息を切らしながら殺気立った猫のように己を睨みつける紬に、公輔は何を思ったのか。

(……怒った紬可愛い)

それは公輔にのみ知り得る事である。

閑話休題。

さて、震えも収まった公輔が、再度ため息を吐くと紬はまたしても顔を顰める。

基本、公輔と話すことに対して嫌悪感を示すことのない紬ではあるが、礼節を欠くような行動には毅然とした態度で接する。

それが友人であれば尚更のようで、頻繁に紬は礼節を欠くことの多い公輔の態度にはかなり敏感。

例えるならば、目上の人である先生とお話をする時。先生に対してうっかりタメ口を利いたりした日なんかにはお隣から鋭い抓り攻撃が背中を襲う。

はたまた例えるのなら、3年前に厳格な紬の父にタメ口を利いたりした日に、正座をしていた公輔の足の裏を思い切り良く、されど華麗に踏みつけられたり。

兎に角、公輔の無礼に対してはかなり敏感になっているのは確かであり、今回もその例に漏れずに公輔のため息に顔を顰める。

しかし、そんなことも露知らずに公輔はもう一度正座し、姿勢を正した紬に笑いかける。

「俺の幼少期の頃の夢、知ってる？」

「……………何ですか、突然」

「いいから、当てるみるよ」

そう言われ、紬は公輔の夢。幼少期の夢を探るべく頭を働かせる。

しかし、その思考はとある考えにより霧散した。

書いてあったのだ。

公輔が何枚も書き連ねていた日記。

幼稚園時代の、平仮名ばかりで書かれていた将来の夢と書かれていた場所を紬は覚えていた。

「魔女、ですか？」

「当たり前。絵本にでてきたとあるお姫様に足を与える魔女が当時はカツコよく見えて

さ、俺もそんな人間になりたいって思った。何かを対価にして人を助けて、その対価で自分も幸せになりたいと思ってたんだ」

「……公輔らしいですね」

「てか、何で分かったのさ。俺ってば幼少期の夢を語った覚えないよ?」

「1冊目の日記帳に書いてあった日記を少々」

「あなたホントこの部屋に何しに来たの?」

「誤字を斜線で直すのは感心しませんね」

「ガサ入れは本日限りで最後にしろよマジで」

公輔の今日何度目か分からないツツコミが紬に放たれるものの、紬はその尽くを躲し公輔に笑いかける。

「人助け、ですか」

「……ああ、人助け。でも、今は違うんだ」

「何が、ですか?」

「俺のなりたいたいもの」

公輔が笑みをなくし、真剣な表情で紬を見つめた。

その瞳に感情の変化を悟った紬が目を見開くと、公輔は1拍間を取り、続ける。

「無償でもいい。それが大切な人の1歩を踏み出す勇気になるのなら、いくら力を貸し

たつて構わない。それこそ今は、キミがしてくれた時みたいに後先を考えずに助けられるような人間になりたい」

——紬。

公輔はそう言うと、再び1拍間を置いて今度は大きく息を吸った。その表情には少しばかりの苦しみも見て取れたが、その表情を押さえ込み公輔は口を開いた。

「アイドル、やりたいんだろ？」

アイドル。

その言葉に、紬は胸がドキツとする感覚を得た。

1か月前、1月の半ばに紬は金沢公演に赴いていたとあるアイドル事務所に声をかけられていた。

名を765プロ。

既に有名なアイドルも輩出している東京ではそこそこの知れたアイドルグループである。

その光景を、これまたお手伝いという名目で近くで聞いていた公輔は紬がアイドルに誘われていること。そして、プロデューサーに名刺を渡されたことを見ていたのだ。

しかし、当の紬はまさかそれがバレていたなんて思いもせず、この瞬間に言われた一言に驚き目を逸らす。

己の夢を、知られて思い浮かべられるのはちよつとばかりの羞恥心と、自らを卑下する
マイナス思考。

「たわいもない、夢でしたから」

「たわいもなくなんてない」

しかし、その思考から発せられた一言を即断で公輔は却下する。

白石紬という少女を知っているこの男にとって、思うところがあるのか、その言葉は
何時もより鋭い。

「紬は可愛いし、ちよつとツンツンした所もあるけど、本当は優しい性格だし、俺は
……そんな紬の優しい心に救われたんだ。そんな紬はアイドルにピッタリ、トップを
狙えると断言したっていいね」

「……何を根拠にそのようなことを言えるのですか、貴方という人は」

「じゃあ、行きたくない？」

「それは……」

紬は、言い淀む。

公輔の言葉は核心を突いており、紬はプロデューサーの言葉に1度はたわいのない夢
と諦めた『アイドル』への想いを再び望みつつあった。

何時か見たテレビの世界に映ったアイドルの優しく、されど優雅に踊る花菖蒲のよう

な姿に、紬は憧れていた。

しかし、好奇心とは裏腹に己の実力は花菖蒲とは程遠く。己の過小評価も相まって、鏡を見て何度も自己嫌悪に陥った。

そんな状況下で、その夢を誰にも話すことはなく。

紬は外の世界の眩しさと、内側の自分の世界の隔たりに、一度は咲きかけた紬自身の魅力を枯らせてしまったのだ。

けれど、幼年期の昔と『現在』は違う。

外の世界に引つ張り上げんとしてくれるプロデューサーがいて。

そして、目の前には背中を押してくれる人がいる。

その事実には、紬の心は暖かくなり一度は枯れたその想いが、再び根を張ったのだ。

強く咲き誇る『花菖蒲』ではない。

今度は自分だけの花を咲かせる為に、外の世界に飛び込む勇気が心の中で湧き上がった。

紬の意志は、決まっていた。

手を引いてくれる、外の世界の見知らぬ男と。

慄く背中を押し、心に温もりを与えてくれるたった一人の親友。

その2人が居て、迷うことはなかった。

けれど、それを正直に伝えるかは別の話である。

「……なら、私は遠くに行っても良いと。公輔はそう言うのですね？」

「え、」

「貴方は私に、1度も行ったことのない土地であの時の公輔のように……無惨に散り、生き恥を晒せと仰るのですね？」

「帰ってきてくれて構わないから！寧ろ何時でも帰ってこーい!!」

先程の余裕の笑みが一転。

最早内々のみではない、クラスメイトからも伝統芸能とも言われている紬の自虐からの公輔あたふたの構図が炸裂する。

公輔は己が発言の失態に今更気がついたのか、『あわわわわ……』と狼狽し、頭を抱える。

それを見た紬は、公輔に見えないようにドヤ顔を見せ、してやったりと内心で握り拳を作る。

彼女は負けん気が強い女の子なのだ。

勿論、本心から発した一言ではない。

普段公輔にポンコツと言われるほど抜けていることも多い紬ではあるが、長年連れ添ってきた親友の言葉の真意を汲み取れない程『馬鹿』ではない。

これは、真面目な紬なりのジョークであつた。

——故に、次に発せられる言葉は紬の内心で既に決まっていた。

「嘘です」

「な、なんだよ……吃驚したじゃあないか」

「……公輔」

「？」

「勇気が湧いてきました」

その言葉に、一瞬目を見開いた公輔だったが、次第にその表情は解れ、笑みを見せる。それは、挑発的な笑みでもなければ不敵な笑みでもない。純粹に、親友であり恩人でもある女の子の決意を応援する暖かな笑顔。

そして、その笑顔のまま公輔は続ける。

「俺は何時でも紬の味方さ。そこは信頼してくれて構わない」

笑顔は人を笑顔にさせる。

真つ直ぐな気持ちは、人の心に伝わる。

公輔の誠は紬の心に届き、その笑みは見知らぬ土地に夢を叶える為に旅立つ勇気を与える。

それが紬にとっては眩しくて、ありがたくて。

泣きたいくらい有難かった。

「公輔」

「？」

紬が、公輔の名前を呼ぶ。

それと同時に、紬は少しだけ目を瞑り、またしても目を開いて、軽く咳払いをする。

「んんっ………」

いつか、名を上げて戻ってきた時。

本当の気持ち、ありのままの素直な気持ちを告げられる一言を白状する。

そんな意志を孕み、咳払いの後——照れ隠しに発した一言は。

「………あんやと」

「なあっ!?!」

公輔の頬を、朱に染めた。

藤の花言葉

かつて、白石紬という少女は一人の少年を救った。

無論、本人にその自覚はない。

涙を流していた当時の少年にかけた言葉も陳腐なものだと自覚しているし、それ以上に藤宮公輔という少年に貰ったものがあると感じているからだ。

それは、一欠片の勇氣だったり、プロデューサーの名刺を貰ったことすらも忘れ、報告もなしに転校先を決めてしまう蛮勇にも近い何かだったり。

過小評価のきらいがある紬にとって、自らを肯定し、評価してくれる公輔はありがたい存在だった。

己が心を暖めてくれる、優しい存在だった。

そして、たかが7年程の關係が何十年もの關係を作り上げたかのような、そんな気安さや親しみがあつた紛れもない親友であつたのだ。

そして、そんな公輔が隠していた数10冊の日記帳を好奇心という名目で読み、成り

行きでアイドルへの道へ行くために背中を押された紬のそれからの行動は早かった。

アイドル了承の連絡をとる間もなく、両親にアイドルになりたいという旨を伝え、了承された後、転入手続きと住居の変更も済ませ、後は1ヶ月後に東京へと移住を済ませればというところまで準備を済ませた。

些か早とちりな1面は垣間見えたが、それほど紬は本気ということだ。ないよりは、あつた方がよい。紬はそう自分に言い聞かせ、分からないところは自分なりに工夫を凝らした。

そのやる気は、両親達を納得させるには充分だったのだろう。

何かと縁のある765プロの勧誘という信頼もあったのかもしれないが、見知らぬ土地でアイドルを行うことを両親は承諾した。

そして、昔とは違う紬のアイドルになり、己の花を咲かせ、幼少の頃に抱いた夢を叶えてみせるという強い意志と勇氣。

今の紬を阻むものは、何も無かった。

「……」

さて、舞台は変わって現在。

和風の一戸建ての一室である紬の部屋で、部屋主の白石紬は座布団に正座をして、目の前に置かれた携帯電話を眺めていた。

それには理由がある。

自身の親友に電話をするということ。

そのために、携帯を手に取り公輔の携帯に連絡を取ること。

しかし、先日の日記の件もあり何時ものように気軽に電話をかけることが出来ない。

その結果、紬は床に置かれた携帯を眺めたまま数十分、そのままの時を過ごしていた。普段の紬が今のこの状態を見れば、恐らく彼女はその行為を『何をしているのか』と一刀両断することであろう。

しかし、今の紬からしたらこの状況は一刀両断することは出来ず……寧ろ、真面目故にあのように想いを曝け出した状態の公輔にどう会話を切り出そうか困惑してし

まっていた。

(挙句の果てには『あんやと』なんて……公輔に、言ったことなかったのに)

『あんやと』は金沢弁でありがとうという言葉を指すわけなのだが、金沢弁での『あんやと』は特に親しい人に向かつての感謝の気持ちを表す一言を意味する。

そして、今までそれを親しい間柄ながら公輔に対してはそれを封印していた紬がふとした拍子に言ってしまった照れ隠しの一言はしっかりと公輔の耳には届いてしまっている。

『え……あ、えーつと。その……俺も、あんやと……?』

『!?…ッ……!!』

今更発した言葉を取り消せるわけもなく、あの子の公輔と紬の間にはなんとも言えない空気が漂い、暫くの間無言の状況が続いてしまっていた。

羞恥心や、ぎこちなさ、すれ違い……様々な要因が加わって公輔と上手く話せなかったのだ。

しかし、それと今回の件は話が別である。

紬が伝えなければいけない要件は、今日伝えなければ効果をなさないもの。既に、両親への了承は経ている。

ある程度の下拵えも出来ている。

後は、電話で公輔に要件を伝えるのみなのだ。

「……ああ、もう」

意を決して、携帯を手に取り電話帳のページを開き、公輔に電話をかけた。

その秒数、おおよそ5秒。

早業である。

1コールの着信音が紬の耳を木霊する。

電話のマナーとして、3コール以内に出るのは基本。

まさか1コールで出るなんて思ってもいなかった紬は1コール目が鳴り響く間に心を落ち着かせようと深く深呼吸をした。

しかし、その瞬間紬にとっては聞き慣れた声が耳に響く——

『もしもし?』

「!?!」

『え、どうしたの!?!』

公輔の声に、紬の心音は急激に早まる。

日記を見つけ、あろうことか方言で感謝の意を述べたあの日から、紬は何処か公輔に

対してよそよそしさを隠せていなかった。

それ故の緊張である。先程から紬の心音は高まり、動悸が止まらない。

それでも、何とか鼓動を抑え、落ち着いた頃には公輔の慌てふためいた声が電話越しから聴こえ、それを黙らせるために紬は声を上げた。

「公輔ですか？」

『お……おう。そりや俺の携帯に掛けてるからな。当たり前つちや当たり前。自明の理ってやつ』

「黙ってください」

『理不尽だ』

さて。

今回紬が今日、電話を使っても公輔に要件を伝えようとしたのには明確な理由がある。

平日、藤宮家は父親が働き、母親が専業主婦として家事をこなすごく普通の中流家庭である。

故に、本来ならば母親が夕方になっても家にいる、そんな家庭であるのだが母方の家で少しばかりの不都合があつたらしく、今日に限って親がいない。

と、なると普段家事をしていない公輔がぞんざいな生活を送るのは目に見えており、

それを紬は見定めた。

そうして、両親のススメもあり紬は電話をかけているワケだ。

「その、今日ですが」

『今日?』

「……」

『ふふつ、どうしたの?』

無言になった紬を見かねたのか、少しの笑い声と共に聴こえた公輔の声。

その声は再び高まった紬の心を落ち着かせ、先程まで言おうとしていたことを思い出すには十分過ぎる効果があった。

「夕餉の支度が出来ています。是非、おいであそばせ」

『夕餉……?え、いいよ。お金は貰ってるし、そこら辺のコンビニで適当に……』

「公輔は私の母が手塩をかけて作り上げんとしている料理を食べない、と言うのですね」
『卑怯だよ!!それ凄く卑怯だよ!!』

ガンツ!という音と共に発せられた公輔の声に、思わず携帯から耳を遠ざける。

やはり、この男と電話をするのは失敗だったか……なんてたわいもないことを考えつつも、紬は最後のひと押しと言わんばかりに一言。

「父も待っています……その、来れないのなら別に良いですが。来てくれると、両親も

喜ぶので」

立ち上がり、月を見ながら自らの頭に付けている水引細工をそれとなく触りながら、紬はそう言う。

基本的に公輔は押しに弱い。

押すのは得意ではあるし、いざと言う時の度胸も備わってはいるがこういった既に用意されている状態で何かを言われると断りきれない優しさが過ぎる心を持っている。

そして、それを分からない程紬は無知ではなかった。

『分かった……そういうことなら、お邪魔します』

電話で話しているため、公輔の顔は見えない。

しかし、その時の公輔の顔は声色から何処か笑っているのだろうということが想像出来て。

その当ても確証もない想像に、思わず紬は口角が上がる感覚を得た。

「ええ、待っています」

電話が切られるのを待ち、切られたのを確認すると携帯電話を棚の上に置き、居間へと向かう。

そのさながらに見えた空は星が輝き、その中心には綺麗な月が1つ、紬の双眼に映った。

「……本当に、押しに弱い人」

そう呟き、紬は今度こそ居間へと向かっていった。

※

瑠璃というものは仏教において、七宝のひとつとして大切にされてきた。

ラピスラズリの宝石の色としても有名で高貴な、そんな色にも似た髪色をした紬は、

時に過保護が過ぎるほどの愛を両親から受け、礼儀正しく、器量良しな女の子に育った。

無論、学校もサボったりするようなことはなく成績も良好。身内や親戚のフィルターにかけずとも、白石紬という少女は模範的な生徒だった。

そんな紬が初めてサボタージュを敢行し、1人の男の子を連れてきた時父は少なからず驚いた。

店の引き戸が開き、店番をしていた紬の父が何事かと引き戸の開いた方を見ると、そこには手を引いて父を見上げる紬と、俯きながら目を伏せている1人の少年が立っていた。

「おいであそばせ……紬？」

「お父さん、その……」

紬の父は、娘に信頼を置いている。

故に、ただサボタージュを敢行しようとしているわけではないということを悟り、一番の為に正座していた畳から立ち上がり、引き戸に立っている2人の子供の元へと歩いていった。

紬の目は、父を相手にしても怯むことはない。

しかし、少年の目はいきなり連れてこられた見知らぬ店に不安を拭いきれないのか、依然として目を俯かせたまま。

呉服屋という見慣れない場所のせいでもあるのだろうな——と紬の父は高を括り、少年の目の高さに自身の目を合わせるべく、しやがみ込んだ。

「キミ、どうしたんや？」

「……」

尋ねるものの、少年は返答せず。

あろうことか俯かせた目を逸らされ、紬の父は大きく項垂れてしまった。

「……お父さん？」

その様子に、今まで無言を貫いてきた紬が思わず口を開く。

その声を聴いた紬の父は、少し微笑み、普段厳格と言われている紬の父の見るも恐ろしい恐怖の笑みではあるものの、視線を公輔から紬に移した。

「先に行きまっし」

「でも……」

「大丈夫、取って食いやせんし……ここから先は大人の出番さけ」

勿論、ここまで少年を連れてきたのは紬である。

しかし、紬には学校へ行くという小学生が課されている『仕事』がある。

子どもは沢山学んで、沢山遊ぶことが仕事だと考えている紬の父にとつて、これ以上この場に紬がいることはないというのがひとつの考えであった。

その考えを悟ったのか、1度は食い下がろうと少年の手をぎゅつと掴んだ紬ではあったが、その手は次第に弱まり最後にはその手を離す。

「……大丈夫です、悪い人ではありませんから」

不安そうに紬を見る少年に対し、その声をかけて紬は今度こそ学校へと向かっていった。

「……さて」

「ツ……!?!」

紬が出ていったことで、2人きりになった少年と紬の父。

体裁的には2者面談にも見えるこの光景は、紬の父にとつては何とも言えない物であった。

何せ、信頼している娘が連れてきたとは言え、何処の馬の骨とも取れない少年を連れて家に連れてくるという荒業をやつてのけたのだから。

大した度胸である、なんて三白眼を持ち普段から何処ぞの893とも間違えられることの多い男が、内心でらしからぬことを考えていると少年が言葉を紡ぐ。

「……あ、あの。俺……あの女の子に知らない間に連れてこられて。け、決して喧嘩とかそんなこと売りに来た訳じゃ……」

「それは分かつとる」

「ひ、ひっ……ご、ごめんなさい」

「いや、そんなに怖がらんでも」

「ぶたないで……」

「叩かんよ!?!」

些か飛躍しすぎた話の内容に思わず大声でツツコミを入れた、入れてしまった紬の父は己がしでかした失態に気が付く。

怯えている子供に大声を上げるなど言語道断、現にさつきまで怯えていた少年はあくを吹きそうな程にガタガタ震えている。

先ほどから少年が怯えているのはこの言葉のせいかもしれないと感じた紬の父は気持ち切り替え、努めて冷静に少年に話しかけた。

「こ、コホン。さつきのは悪かった。目については、別に怒つとるわけではないさけ、気にせんでや」

「……は、はい」

「ところで、キミの名前は?」

「……ふ、藤宮」

「そうか、となると……」

つい最近近所に引っ越してきた家があるということとはまことしやかに伝えられてい

た。

表札の名前も馴染みのお客さんから伝えられていたこともあり、この少年があまり遠くの子ではないということを感じひとまは安堵。

しかし、そう長く悠長には構えていられない。

「えつと」

「……？」

「取り敢えず、座わらんけ？こうして表でお話するのもなんやし……ほら、あそこの畳へ来まつし。お茶も用意するげん」

兎にも角にも落ち着いた場所で、落ち着いた話をするのが肝要だと感じた紬の父は、藤宮少年を店の奥の畳式の部屋へと案内する。

しかし、それを見た少年はその華奢な体を震え上がらせ一歩後ずさる。

「……み、見知らぬ人。見知らぬ店。自己紹介……なし」

「？」

その言葉に紬の父は目を丸くすると同時に、少年の心に感心する。

つまり、この少年は自らと己が自己紹介をしていないから、知らない人に付いていくことは出来ないということ述べているのだ。

成程、確かに不用心だった。

紬の父は藤宮少年の言葉に理解を示し、己の浅はかさを悔やんだ後に、少し微笑み少年の肩に手を置く。

「そうか……ごきみつつあんな。じゃあ今から自己紹介しまいか……」

「キャッチセールス……ッ！」

一瞬、時が止まった。

「へ」

「きや、キャッチセールスというのは店や個室に誘われた不用意な若者が契約の不慣れにつけこまれて長時間拘束の末に契約を結ばれてしまう悪質な詐欺のことを指してましてこういつたセールスの対処方法はとにかく逃げることに強い意志で断ることであり今回の件はそれに該当するのかもしれないと思つた次第であります……げほっ、コホコホ!!」

「ああつ、一息でそんなに多くの言葉を述べるから……というかそんなことはしない

し、大体そんな言葉どこで……」

「精肉店のおねーさん！」

「お姉さん!？」

少年はとあるおねーさんに怪しい人についていつてはいけないということを学んでいたらしい。

尤も、今のこの状況はそれとはかけ離れているため、注意深いどころか失礼な言葉を発してしまっているワケなのだが、そこは気にすることなく紬の父は続けた。

「じゃあこうしよう。キミは何かおかしいと思つたら即断即決で逃げていい、紙類は一切出さない……これでどうだ」

「裏切りの連鎖……人は人を裏切る。逃れられない……業」

「今度のそれは何知識!？」

思いのほか注意深かった少年の言葉に今度はツツコミを入れてしまう。

それに対し、やや驚き一歩下がる少年。

しまったな、と内心思いながら紬の父は少年に猜疑心を持たれないよう、普段の金沢弁をあまり喋らないように意識する。

方言に慣れていない少年を相手に方言を喋るということはコミュニケーションを取るための最善策ではないと感じた故である。

「娘がここまで連れてきてくれたんだ。安心してくれ、ここはちゃんとした店で、私はそういう種類のことは決して行わない。ああ、約束して見せるさ」

「……そういうことなら」

そして、その作戦は功を奏したのか。

落ち着きの色を取り戻した藤宮と紬の父は奥の座敷へと歩を進めることになる。

その時間およそ20分。

厄介なことになってしまったと紬の父は内心頭を抱えつつも、せめて目の前の少年に對しては真摯になろうと気持ち切り替えた。

奥の座敷に對面する形で座る。

用意した座布団に對し、藤宮少年は遠慮がちに避けていたが紬の父が『座りなさい』と促すと、今度は拒否する時間もかからずに隣の座布団に正座を敢行する。

用意したお茶を一口啜り、紬の父は對面する藤宮にこう切り出した。

「学校生活は、辛いかい？」

その言葉に藤宮少年は目を見開くものの、またしても目を細め伏し目がちに尋ねる。

「どうして、ですか？」

「簡単なことだ、ランドセルを背負ってこんな時間から外にいる。小学生、並びに学生だということは一目瞭然さ」

落ち着いた雰囲気と語調で語られたその一言に藤宮少年はギョツとした様子で自らの背中に手を当て、やがて観念したように俯いた。

「学校……辛いです」

「怖い？」

「はい、怖くて……みんなと話すのが、できないです」

「勇気が湧かない、か」

「はい……なんで、分かるんですか」

「私はキミの人生の2倍以上生きているんだ。キミの考えることも、その理由も概ね理解できる」

なんとなくではあるが、紬の父は少年が元気のない理由を掴みかけていた。

少年は、この街に恐怖心を抱いている。

それは、そうだろう。

知らない街、知らない人。

離れ離れになった友人、街並み。

違うものだらけの世界と、離別の苦しみの中で辛くないワケがない。

少年の人生の2倍以上生きてきた紬の父には、それが分かっていたのだ。

否、この場合悟ったといった方が正しいだろうか。

「怖いものは誰だつて持つてるさ。けど、それを恥ずかしがることなんてない」
優しく、語りかけるように言葉を発する紬の父。

その言葉は少年には意外だったらしく、今まで目を伏せたり、俯いたりして紬の父の眼から逃げていた少年が、ここで一度紬の父の目を見据えた。

光のように明るい少年本来の目が一度だけ、数コンマの秒数で戻ったのだった。

「でも、怖いものは克服しないといけないっておかーさんが……」

「勿論。けど、それに焦り、2倍速で物事を解決しようだなんて思ったたら本末転倒だよ。今の君に出来ることは、目の前の課題と向き合つて、上手く付き合つていくことだ」

怖いものは何れ克服していかなければならない。

それは、人としてのレベルアップを志すものなら直面するであろう課題である。

しかし、そのために必要な段階を2段飛ばししても課題は達成するのみならず焦燥感から、永遠と解決できない負のループへと陥ってしまう。

紬の父にはそれが分かつており、そして目の前の少年が誰にも頼らずたった一人で課題を解決しようとし、今まさに負のループに陥つてしまつているということを悟つていたので。

故に、手を差し伸べる。

この少年が、1人きりにならないように。

1人で物事を解決し、これ以上負のループに陥らないように。

言葉という救いの手を差し伸べたのだ。

「最初から完璧なんてない。一つづつ、解決していこう。キミならそれができるさ

……藤の花を苗字にもつキミならね」

「藤の……?」

首を傾げて、藤宮は紬の父を見遣る。

その視線に晒された紬の父は、くつくつと笑みを零して続ける。

「藤の花言葉は知っているかい?」

「はな、ことば?」

「そう、花言葉。キミの『藤宮』の藤が付く花は、優しき、歓迎するという意味があるんだ

よ」

「……それとこれに、なんの関係が」

「言霊と言ってしまえば大袈裟に感じるかもしれないけど、キミの苗字からは優しさが

想像出来るんだ。きっと、キミは多くの出会いや弱点、悲しみすらも歓迎できる……

そんな優しい人間になれるって予感がする」

藤の花。

立场上、そういったことにも目敏くなってしまう紬の父にはその藤の花と藤宮という

少年が酷く重なって見えていた。

一見、疑り深いきらいがあり己を守るために失礼な一言を発してしまう男の子。

けれど、その行動原理は至ってシンプル。それは、今までに関わってきた人達の教えを忠実に守り、他人に迷惑をかけまいとする『優しさ』。

今回は、それが裏目に出てしまったただけなのだ。紬の父は思案する。

優しさは時として人も己も傷付ける。

それは、その優しさを己が為か、誰が為に使うことでどちらかを犠牲にしてしまう故に発生してしまう事故のようなもの。

今回は、少年は誰が為の優しさを尊重して自分に優しくなれなかった。

もっと、少年は人に頼っていいのだ。

他人に甘えて良かったのだ。

苦しいと、辛いと、素直に吐き出せば良かったのだ。

「藤宮くん」

「？」

「私はキミの友達になりたいな」

「……………」

その言葉に、ようやく紬の父の目を見て話せるようになった藤宮少年が目を見開いて

素つ頓狂な声を上げる。

その声に少しばかりの笑みをこぼした紬の父はお茶を一口啜り、続ける。

「いやあ、最近娘は私の家内とお風呂に入ることが多くなつてね……娘と同一年位のキミと、是非色んなことを話してみたいんだよ」

勿論、その理由は間違いではない。

しかし、それよりも思つたことはこの少年に必要な『友達』のように笑いあい、会話ができる人に自分になるべきだということ。

幼い頃から引越し、見知らぬ土地でいつも通りに振る舞うのには無理がある。

ましてや、東京とは何もかも違うということも少年の人見知りには拍車をかけていた。

これ以上拍車をかけ、少年を孤立させる訳にはいかない。

紬の父は、いつの間にかこの少年のことを気にかけてしまつていたので。

しかし、そんな紬の父の言うことに公輔はやや訝しげに眉を潜める。

「代役ですか……?」

「そんなことはないさ……暇になつたら何時でもここにおいで。この街の楽しさを、心ゆくまで教えようじゃないか」

そう言つて、手を差し出す紬の父。

相変わらず笑みは恐怖的なそれではあるのだが、人は必ずしも外のみで判断される訳

では無い。

時に人はその人の内面を悟り、その優しさに胸を温め、その想いに応えるのだ。

公輔は、紬の父の怖さがありながらも人を想う心を言葉から悟ったのだろうか、差し出された手を掴んだのだった。

公輔は、その差し出された手の勢いと同じように遠慮がちな怯えた表情を紬の父に向けた。

その表情に、己の笑顔に対しての不安をここで初めて感じた紬の父は、笑顔で怖がらせる位ならと、表情を作ることを止めて素の、無表情へと戻る。

「……………あの」

「気安く構えてくれて構わないよ。あくまで私とキミは『対等』だ……………私の名前は白石しらいし琥珀こはく、あの子の父でありこの店に務めているしがない男だ、よろしく」

「……………藤宮、藤宮公輔。よろしく……………白石さん？」

「そこは呼び捨てにしないか」

「そんな度胸、ないです」

「……………まあ、そこは追追慣れてもらえればいいかな」

畳の上で正座をする2人。

公輔にとっての初めての初めての友達が、この紬の父である白石琥珀であった。

厳格なところがありつつも穏やかな笑みを忘れず、他者への配慮を忘れない昔気質の快活な男。

そんな男と友達という奇妙な関係となり、公輔は徐々にこの街に順応していった。暇があると、呉服屋に出向き琥珀と会話をするようになる。

学校で何をしたのか、今日の給食は何か、最近の流行り、時には琥珀が呉服の知識を公輔に教えたりと良好な関係を築き上げていった。

そうして7年。

あれからいくつかの変化があった。

公輔が東京に居た頃の明朗快活な様子をすっかり取り戻し、紬の親友をする傍らで彼女にひっそりとした恋心を抱いていた。

呉服屋で掃き掃除や、レジ等のバイトをしてお小遣いを稼ぎ、貯めたお金で紬にプレゼントをしたり。

そして、何より大きく変化したのは――

琥珀が公輔を藤宮君と呼ぶのを止め。

公輔が琥珀を白石さんと呼ぶことを止めたことだろうか。

※

「だっはっは!!だから所沢遊撃隊は解散しましたって!!いつまでそのネタ引き摺るんで

すか!!」

「ははっ、良いじゃあないか。そうやって話題に挙がるということは、名誉なことだと私は思うがね」

時は、夜。

場所は白石宅。

キッチンにて料理をしている紬の母が野菜を切っているすぐ側で、和室の中心に置かれたテーブルを男2人と女の子が囲んでいた。

その様子は、まさに賑やかといった様子で先程から笑いが絶えない。

男2人の共通の趣味である野球も、この会話の盛り上がりの流れを棹らしていた。

尤も、1人の女の子が疎外感か、あまりの喧騒感からか張り付いた笑みをそのままにしているのだが。

「……………」

「おやおや、どうしたんだいつむつむ。まるでゴミを見るような目だよ?」

「はっはっは、最近私と公輔君が喋りこんでいると決まって不機嫌になるねえ」

「近所迷惑、と遠回しに伝えていなのです」

理由は、どうやら2人の騒がしさだったらしい。

確かに、2人の騒がしさというより盛り上がりはとある野球チームの話題により、最

高潮に達していた。

両親のサッカー好きとは違い公輔は野球が好きであった。

理由は、幼少の頃に見ていたとある埼玉のチームの一、二、三、四番打者に惚れたからとかいう理由だが、公輔からしたらそれは充分過ぎる理由だ。

そんな折に出会った、隠れ野球ファンの琥珀。

何度か出会う内に、野球の会話を交えるようになった2人は、こうして会っては野球の会話で盛り上がるようになった。

「……むぐ、これでも反省はしてるんだぞ」

だからそんなにゴミを見るような目を向ける必要はないじゃあないか、と公輔がぶつたれていると紬がその態度に目を細め公輔を睨みつける。俗に言う、ジト目という奴だ。

「大体、公輔は父に対しての礼節がありません。以前は慎ましい性格をしていましたのに、それが退化するとは……もしかして、貴方は退化するヒトなのですか？」

「退化!?!」

紬から発せられた思いもよらぬワード。

馬鹿と言われるであろうと身構えていた公輔は紬の思わぬ反撃に、驚きの声を上げた。

「いえ、これを退化と言わずして何と申うのでしょうか……違いありませんね」

「さりげなく一人で完結させるのやめてくれませんか。あのな、紬。これには海よりも深く、山よりも高い理由があるんだよ」

「……その理由とは？」

「俺達、実はカテゴリ的には友達に分類される仲間なんだ」

「聞いて損しました」

「ヴァアッ!」

公輔必死の弁論も、紬には通じず遠慮のない一言が公輔の胸に突き刺さる。

これじゃあまるで俺はヒト以下じゃないか……と項垂れる。

しかし、そこで思わぬ助け舟が公輔を救った。

「本当や、紬」

公輔と紬の喧嘩を着にして日本酒を呑んでいた琥珀が口を開く。

厳格ではあるものの、優しい面もある琥珀は紬にとって頼れる父であり、威厳を感じることもある父だ。

呉服屋を営み、765プロを含めた大口の客も多い中で、常にお客様の立場に立ち、良質で、その人に会った呉服を提供する父の姿を紬は尊敬している。

「お父さん……それ、どんな理由やけ？」

父なら、この親友が無礼を働いても咎めることのない理由をしつかり話すのだろう。そんな淡い期待と、ちよつとした好奇心を胸に紬が尋ねると、琥珀は両手を広げ笑みを見せた。

「ズツ友、やちや」

「は……ずつ友？」

「ほんなんがや、私と公輔君はこの土地で出会ったズツ友。これは、紬にも母さんにも干渉することの出来ない、永遠の友情げんて」

「……琥珀さん!!」

「公輔君」

『うえーい』と拳と拳を合わせる公輔と琥珀。

その光景を見た紬のまるでゴミを見るように細められた目。

その光景が発生している和室で、料理が入っているお盆を持ってきた紬の母が入ると、その空気が弛緩する。

「おあがりあそばせー」

置かれたのは人参やこんにやく、れんこん等が程よい大きさにカットされている煮物、味噌汁。そして、焼き魚。ほうれん草のおひたしや、和食全般がこれでもかという程置かれている。

「えっ、だし巻き玉子……」

そして、公輔の好物で綺麗に整えられただし巻き玉子が公輔の近くに置かれると、公輔はそのだし巻き玉子に目を奪われる。

実はこれ、公輔が来る前に紬の母とは違う『どこかの誰かさん』が作ったのだが、それは公輔の知る由ではない。

「覚えててくれたんですか？」

「ふふっ、公輔君良くうちの料理を食べに来るから。これくらい覚えてなきや主婦じゃないわよね……ねえ、紬」

「……知らんげん、何でうちに振るん？」

「……へへっ、ありがとうございます」

公輔は本当に嬉しそうに目を細め、卵焼きを見つめた。涎が垂れそうな程に綻ばせられた口元は年相応ではない、少年の笑みだった。

高2にもなると、流石に子供らしからぬ所も現れてくる。

7年前は、紬よりも小さかった男の子。

筋肉は華奢で、茶髪めいた髪の毛は長めで、覇気もなく、年の割に幼い、そんな印象が拭えない男の子だった。

しかし、今ではその背丈は優に紬を超え、しゃんと伸びた背筋に程よく鍛えられた筋

肉、そして短めに切られた茶髪が公輔の端正な顔を少年ではない、1人の好青年たらしめていた。

しかし、こういった時。好きな物に対して正直な公輔の気持ちや表情は、何ら変わることはない。

そんな光景に、紬は思わず頬を緩ませる。

「公輔、お茶のお代わりは致しますか？」

「あ、いいよ紬。流石にそれは俺が……」

「構いません、客人ですので」

公輔が立ち上がるとうとするのを紬が手で制し、立ち上がる。

紬に取っては、幾ら慣れ親しんだ仲だとしても客人の立場である公輔に茶の用意をさせる訳にはいかなかった。

それ故に、幾らかの鋭利な刃物のような言葉で公輔を制し——『え……俺、また何かやっちゃった？』とでも言わんばかりにおろおろしている公輔を後目に、台所へと向かっていった。

※

藤宮公輔は、悶々としていた。

それは自らの親友に晩御飯食べに行かないかと言われ、付いてきて、直後に日記帳を見られてからというもの、どこかよそよそしい様子でいた紬が何時ものような高貴で辛辣な様子を取り戻していたからである。

これぞ内弁慶というのか、家で強気で外ではよわよわとかなんだよそれ可愛いかよ——なんて紬の魅力の虜となり内心頭を抱えていると、不意に紬の父親である琥珀が公輔を見て、笑みを零す。

「……なんですか」

見られた光景が光景だと今一度表情筋と気持ちを引き締め、公輔が琥珀にそう問いかけるとその笑みを崩さずに、寧ろ2割増しで濃厚な笑みと化した琥珀が一言。

「いや、公輔君がここに來てからというものの毎日が煩いほど賑やかだね。本当に飽きないよ」

「それは、褒められてるんですかね?」

「ああ、勿論さ。親として、人として、こうして友人が娘と仲良くしてくれているのは嬉しい限りさ。正味、付き合つて貰つても大いに構わない」

その瞬間、ガンツ!!と鈍い音が家中に鳴り響く。

その音の発生源は台所。

紬が何かやつてしまったかと公輔が台所を見遣るが、その後は大した音はせず、再びお茶を淹れる音がした為琥珀と公輔はお互い苦笑いをしながら、会話を続ける。

「まあ、こちらとしては大方分かりきっていることなんだが……一応」

「?」

「紬とは仲良くしてるかい?」

在り来りなその質問に、公輔は笑顔で頷く。

紬が果たして己に対してどのような感情を抱いているのかというのは公輔には分からないが、公輔は紬との関係を心地よく感じている。

押して、引いて、偶に押し返されて。

そんな手押し相撲のような関係が公輔にとっては気持ちが良いもので、今ではこの生活抜きでは考えられない、そんな想いすら抱いていた。

昔はあんなに怖がつてのにな……なんて半ば自虐のような考えを頭に浮かばせ、ク

スリと笑みを見せた公輔はその笑みを顔に表したまま、答えた。

「お陰様で、仲良くやっていますよ。ただ……」

が、人生何事も上手くいくわけではないというのも事実である。

先程まで快調だった公輔の笑みは不意にとあることを思い出し凍りつく。

「ただ？」

「日記帳がバレた」

「なんてことだい」

「あらあら」

そう。

公輔にとつての懸念材料、それは日記帳がバレたことであつた。

良くも悪くも『事案』は日記帳から始まったのだ。

日記帳から始まり、紬に本心を知られた。

日記帳から始まり、紬がよそよそしくなった。

その他にも色々あるが、公輔にとつては主にその2つの事案が己が心を苦しめていた訳だ。

大体、予想外だと公輔は内心ぶーたれる。

本来ならもう少し段階を踏んで、ちゃんとした場で恋心をさらけ出そうというプラン

があつたのに、たった一つのノートでそれが台無しになつてしまつてはたまつたものは無い。

公輔は運命の神様の悪戯に頭を悩ませ、内心で中指を立てた。

「日記帳というと、あれだろう？以前キミが言つてた、隠している日記帳とやらだろう」

「はい」

「……成程、それであの日は紬が一日中頬が赤かつたんだな」

「赤面する紬……だと？」

「知らないのかい……ああ、そうか。最近一人で帰つてくることが多いと思つたら、公輔君を置き去りにしていたのか」

「おい、そんなことより赤面する紬に関しての情報を寄越さないか」

「眼福、やちゃ」

「尊いッ!!!」

ここで、紬がお茶を持ってきて公輔の隣の席へと座る。

公輔がコポコポと小気味良い音を鳴らし湯呑みへと入つていくお茶を眺め、紬に感謝の意を込めて座礼し、それを華麗に紬が受け流しているその様を眺めていた紬の母は少しだけ目を細めて紬を見た。

「……お母さん？」

「昔は公輔君のこと大好きーって言ってたのに」

「そ……そんな昔のこと言わんといて!!」

「ふあっ!？」

過去を開陳された紬はその時の出来事を思い出し、思わず赤面する。

無論、この場で紬の母が嘘をつくわけがない。

紛れもない本当である、ガチである。

しかし、その時の言葉はあくまで『Love』ではない『Like』。

少なくとも当時はそうであった紬の言葉尻を母に呆気なく取られた紬は慌てて己が母に訂正を求めた。

しかし、彼女は最愛の娘の言葉をまともに受け取らないどころか『あっはっはー』と笑いながら、お茶を啜った。

さて、先程までの衝撃的事実に身を震わせ心をときめかせていた公輔ではあったが、この場で舞い上がり続け、冷静さを欠く程馬鹿ではない。

少なくとも日記帳よりかは羞恥度は低いな……と己に言い聞かせ、好物のだし巻き玉子をぱくつくと、何とも言えない甘みが口内に広がった。

「ああ……美味しいっ」

だし巻き玉子は神だと友人にも、親友であるところの紬にも公言している公輔。彼の

だし巻き玉子に対する愛情は他の追隨を許さぬ。

その事実を長年親友兼藤宮少年時代のお世話係的な何かを務めてきた紬は痛いほど知っており、相変わらずの玉子愛に呆れ半分の面持ちで公輔の笑顔を見つめる。

「だらの三杯汁とは良く言ったものですが……そんなに美味しいのですか？」

「うん、やつぱだし巻き玉子は甘めが一番だよ！形も整つて……本当、今日は誘つてくれてありがとう」

紬から誘いがなかったら間違ひなくコンビニでおにぎりを買っていたであろう公輔はだし巻き玉子を食べた後にニコリと笑みを見せる。

が、紬はそれを見ることはなくそつぽを向いてご飯を食べる。

「そのような調子のよい台詞を、よくぞ臆面もなく言えるものです」

「事実だからな、そこは何とも言えない」

手厳しい事実ではあるが否定は出来ないその言葉に苦笑いをしながら、そう言う公輔の顔をついぞ紬は見なかった。

その代わり、公輔は紬の耳がはつきりと赤くなっていることに気が付き、この娘やつぱり可愛すぎだろ——と内心悶え、それを誤魔化すかのように白米をかきこんだのだつた。

「そういえば紬。今月中に東京へ行くと言うとつたが、準備はしとるん？」

時は変わって一時間後。

食事を終わらせ、お茶を飲みながら一段落していた琥珀は『是非この後の甘味も食べていつて!』と立ち上がろうとする公輔を揺さぶる己の妻と、それを受けてグロッキーになりかけている公輔を脇目に紬に質問する。

琥珀が気にしていたのは住まいのことである。

幾ら娘を信用しているにしても、紬はまだまだ未成年。

まさかこんなに速く娘が一人暮らしをすることは思っていなかった訳で、少しばかりの心配と、不安を抱えていた。

「り……綸子、りんずさん……も、やめ……」

「じゃあ甘味食べる？」

「お、お腹いっぱい……」

「食べまっしし♪」

「あああああ!!!」

またしても愉快犯であるところの妻が公輔を揺さぶっている様を見て、琥珀は公輔と初めて出会った時のことを思い出す。

あの時の公輔とは打って変わったような明朗快活な姿から学んだことは幾つもある。そのうちの1つが環境。

環境は人を思うがままに変えるというのは公輔と出会う前の琥珀も分かつてはいたが、琥珀のその考えは公輔と接していくことで更に強くなった。

誰一人としてこの土地に友達がいなかった臆病な少年は、自分の優しさを己が為に向けることで、人に頼ることを知った。

そして、新たな環境で友達を作り明朗快活な姿を取り戻し、あるいは形成した。そう。

この一連の流れを見ているからこそ、琥珀はこれから環境を変えんとしている紬に対して不安を抱いていた。

今は、信頼できる友達と仲良く学校生活を送っている紬。

仮に環境の変化が功を奏せば、紬は目指しているアイドルとしても、人としても成長することが出来るであろう。

交友関係も広がる。1人の父であり、人と人との繋がりは大切だということを仕事上知っている琥珀からしたらこれ程嬉しいことはない。

しかし、仮に失敗したら？

仮に環境の変化が悪影響を及ぼし、彼女が孤独になってしまったら？

その時は、例えアイドルとして成功したとしても素直に喜ぶことは出来ない。

学生の本分は学問と友情と信念、そう考えている琥珀はアイドルをしたいと己の口から自分の夢を告げた紬を見た時、その夢を応援すると決めたのと同時に彼女がもし孤独の道に突き進まんとしたならば引きずってでも家に帰すという強い決意を抱いていたのだった。

娘の失敗を祈るような男ではない。

しかし、万が一環境が紬に向かなければ……なんてことを考えてしまうと、環境の面で最も重要である住まいにどうしても慎重になってしまうのは致し方のないことではあった。

そんな琥珀の質問を聴いた紬は、お茶を啜り喉を潤した後に琥珀に予め決めていたことをさも当たり前のように告げる。

「準備はしとるから、1人で行くけど……」

「とはいえ、道がわからなくなつた時が心配やげん。お前は機械音痴のきらいもあるさけ、ナビゲーター的な奴がおつたらええんが……」

そう言いつつ、目を瞑り暫し思考に耽る琥珀。

しかし、その思考に数秒と耽る間に1人の少年が声を挙げる。

無論、その声は茶髪青年、公輔から発せられた一言であった。

「い……い……いよ」

「え」

「俺と一緒に東京行くから」

公輔は東京生まれの少年である。

それ故にこの地に引越してきた時は慣れない土地や方言に悩まされ、そして紬や琥珀らといった白石家の方々に救われた過去を持つていた。

そんな公輔には慣れない土地に行くことの不安や心細さ、難しさのようなものを心得ており、そんな課題に親友であり、かつ想い人であるところの紬が直面しようとしている。

公輔にとって、紬に手を貸すという選択をするのは難しい問題ではなかった。

「……………良いのですか?」

「うん、それなりに土地勘持つてるし……………紬は絶対地下鉄で迷いそうだし」

「迷いません」

「保証もないでしょうに……………」

何処か強がりとも取れる紬の即答に、公輔は苦笑する。

不安は一入であり、悪い人に話しかけることもあるかも知れぬ。

それらを危惧した公輔は、窘めるような優しい語調で一言。

「こういう時くらい、俺に頼って欲しいんだ」

「…………でも」

ところが、紬の顔は優れない。

それどころか、その表情はまるで恐ろしげなものを見るかのように怯えた顔つきとなっている。

しかし、その真意が公輔には分からぬ。

強いて分かることと言えば、今この場で白石紬という少女が何かに怯えていることだった。

「…………その」

やがて、紬が一言。

その言葉に公輔は眉を顰め、首を傾げた。

「？」

「貴方はもしかして、日頃の恨みを込めて私を東京湾に沈めようとしているのでは

…………？」

「東京湾ッ!？」

ツム・バズーカ炸裂。

その言葉は公輔の心に風穴を開け、頭を項垂れさせるには十分な破壊力を持つていた。

救いは、彼女が無自覚なところなのか。

項垂れた公輔を見遣るのは『えっ……えっ……えっ?』とでも言わんばかりにあたふたしている紬と、生暖かい視線で見遣る琥珀と紬の母であった。

何を隠そう、公輔にとって紬の自虐的言動は心に風穴を開けるバズーカにも近い威力があった。

何せ、己の好きな人が自らのことを貶めたり、自己評価の低さにより好かれていないなんて、自虐にも近いことを仄めかす発言をするのだ。

それが公輔にとっては何とも歯がゆく、心苦しく、かついじらしくて。

その奥ゆかしさのような何かに好きという感情と、止めて欲しいという感情の間でジレンマのような何かを感じてしまっていた。

しかし、公輔は思う。

先程の東京湾もそう、日記を見られた時もそう。

紬は綺麗で、可愛いと。

それと同時に、その紬の『らしさ』に自信を持って欲しいと。

心の底から、紬の可愛さを認めているからこそ、公輔は紬のそう言った罵倒にオロオロと慌てふためき、何だかんだで否定するのだ。

「し、沈めないから……普通に頼ってくれて良いから」

「……分かりました」

依然として疑わしげに公輔を見る紬であったが、やがて彼女は観念したかのようにため息を吐く。

その姿に公輔が目を見開くと、それと同じタイミングで紬は軽く頭を下げて一言。

「そういうことなら、よろしくお願い致します……公輔」

「……おうー！」

紬がその声に顔を上げると、任せとけと言わんばかりにニコリと笑みを浮かべた公輔。

その笑みに、紬が遠慮がちな笑みで返すと2人の間には何処か優しげな、暖かな空間が蔓延する。

その空間は、少し前の2人からは想像できない程の不思議な空間で。

その空間に晒された公輔は、改めてこの子の事が好きなんだという確信を得たのだ。た。

「……愛やなあ」

「恋ねえ」

さて。

いつの間にか、2人の空間を意識せぬ内に作ってしまった公輔と紬。

その空間の蚊帳の外にされてしまった琥珀と紬の母はお互いの顔を見てニヤリといやらしい笑みを浮かべながらそう呟く。

笑みを浮かべ、無言の空気を作っていた2人。

勿論、蚊帳の外の2人が発した一言はしっかりと聞こえており、公輔は『たはは……』と苦笑して頭をかき、紬はその言葉を真に受けて、つつい言葉の面で『素』が出てしまう。

「……恋、とか。ほんなこと、うち……」

「あは、やっぱ恋ですかね。俺は勿論『大好き』ですけど……」

「くっ!!あてがいなこと言わんといてッ!!」

「あー待って、紬!!悪かったから!!だから抓るの止めて!?!本当に止めて——痛い!!痛いから抓らないで!!」

照れ隠しか、若しくは本物の怒りか。

顔を真っ赤にした紬は公輔にその顔を見られないように、顔を背けながら抓る、ノーリック抓りを敢行する。

その攻撃は公輔の脇腹を見事にヒットし、公輔は悲鳴を上げながら制止を促す。

そして、それを見ながら2人の親は、数年前から見てきた2人の成長に顔を綻ばせ、『いいぞ、もっとやりまっし——』と紬の攻撃を煽る。

ここから先は言うまでもない。

今日の白石家の食卓は、賑やかであったというのはこの4人が何より分かっている事なのだから。

出合いと繋がり

それは、過去のとある朝方のことであつた。

朝方は父親が仕事に出て、母親も用事があるということで半ば追い出されるかのような形で、家を飛び出した公輔。

藤宮家から通う小学校との間には幾つもの住宅街とひとつの公園があり、その街並みを見ながらてくてく歩いていると、不意に女と目が合ったのだ。

「……あ」

「……あら」

視線が交錯すると女は目を見開き、公輔はバツが悪そうに目を背ける。1か月前にとある家の女の子とそのお父さんと話してからというもの、サボることを考えず学校に通うようにはなった公輔。とはいえ、依然として人見知りのきらいは克服しきれておら

ず、故郷にいた時のような快活さは取り戻せていなかった。

故に、挨拶もせず目と目を背けるといふ人付き合いでは凡そタブーとも取れる行為を犯してしまったのだが、肝心の女はその行為を気に留めることも無く男の子に切迫する。

その距離間、約10cm。

音速とも形容できる女の身のこなしに、思わず後ずさりしてしまった公輔。その様子を見た彼女はクスリと笑みを見せ、公輔の手を掴んだ。

手を掴まれたことにより公輔の肩がビクリと跳ね上がる。長い爪、女特有の柔らかい手の感触。殊更女の人と手を繋いだ経験がほぼゼロの公輔は急に触れられたことの驚きと共に、羞恥のような何かを感じてしまった。

「来まつし」

「……き、きま……？」

慣れない行為と言葉に慌てふためいた公輔を気にもとめずに女は続ける。

が、今度は己が慣れ親しんだ土地で使っていた方言を使わないように気をつけながら。目の前にいる少年を労わるように一言。

「あ、えーと……来て、こっちこっち」

分かりやすく訳されたその言葉に公輔は呆気にとられつつも、優しく手を引つ張られたことにより、なし崩し的に付いていく。所々で告げられる女の指示に従い、靴を整え、

ランドセルを置き、通路を通り、最終的に辿り着いたのは畳部屋の個室。

普段から警戒心を怠ることの無い公輔は勿論この状況を最初から危惧していた。防衛反応が働き、一瞬後ずさることで逃げる体勢も取っていた。

危険は逃げることで対応する公輔のことだ。そのリテラシーで以前呉服屋に連れていかれた時も、警戒を怠らずに琥珀という目付きの鋭い男に対応することができた。

しかし、今回は相手が悪い。

女は、積極果敢が過ぎるほどの動きで少年の手を掴み、驚く間に優しい笑顔を見せ、油断させ、その隙を突き連行する。彼女だからこそ出来る策士ぶりに、警戒心を揺さぶられた公輔は見事に籠絡されてしまったのだ。

その姿はまさにチヨロイン。

追い詰められ、それに気が付き戦慄の表情を浮かべるチヨロイン公輔を見た女は自らが用意されていた座布団に座った後、公輔に座るよう促す。

「(ハハハ)つ(ハハ)へ来て」

「……座つて、良いんですか？」

その質問に笑顔で応えたのは他でもない、女である。庭のある立派な一軒家に連れ込み、茶の間の部屋まで連行され、笑顔でその質問に答える様は一種の威圧感さえ感じる。

そんなオーラののような何かを子どもながらの直感で感じた公輔。断ったが最期だと感じ、女の指示の通りに用意されている座布団に正座を敢行した。

住宅地であるが故に喧しきはなく、聴こえるのだとしたら小鳥の囀り位のものである。部屋も、和室故に配色が大人しめであり、物も少なく畳の香りが鼻腔を擽ると同時に、公輔はひとつの疑問を抱く。

この人とは初対面。

単純に、何故この人が自分をこの部屋に連れ込んだのか。それが公輔は気になったのだ。

「…………あの」

どうしてここに俺を連行したのか。

そう言おうと口を開いた公輔だったが、その一言は女によって遮られる。

その時点で公輔は悟った。

ここは今、まさに目の前の女の人のペースだと。

「お茶」

「…………お茶？」

「麦茶？紅茶？それとも抹茶が良いかな…………時間はかかるけど」

3つの選択肢を与えられ、公輔は考えを巡らせる。こういった客人で居る時、あまり

手を煩わせないようにしろという父母の教えにより、すぐさま抹茶を除外すると、残り
は好みの問題により公輔の選択肢は1つに狭められる。

公輔は、どちらかと言えば渋いものを好みとする。無論、甘味を食べられないという
訳では無いのだが。そのような好みにより、公輔は綸子に提示された選択肢の中の1つ
を言おうと、口を開いた。

「む……」

「む？」

「む、麦茶でお願いしましゅー」

そして、舌を噛む。

それも、言葉を間違える意味の噛むではなく、まともに舌を噛んでしまうというおま
け付きである。

羞恥、情けなさ、痛み。

3つの悪感情が一気に頭の中に押し寄せた公輔は『痛い……』と呟きながら、涙目
で口元を抑えた。

そして、そんな少年が羞恥で耳を赤くしつつも前を見た瞬間に見たのは恐怖を絵に描
いたような絵面であった。

俯きながらぶるぶると震える女。しかし、目付きや表情はその長い髪により隠れてし

まい笑っているのか怒っているのかがまるで分からない。

そんな10人中9人が先ず怖がるであろう不気味さに、公輔は思わず情けない悲鳴をあげてしまった。

「……ごめん、今から、麦茶持ってくるからっ」

しかし、その悲鳴を女はあたかもなかつたかのように振る舞う。依然としてふるふる震える身体と、踊る膝を両手で叩き、喝を入れた後に立ち上がる。

ガタガタと震えていた公輔であつたが、その元凶が部屋を出ていったことで、次第に震えが治まっていく。

尤もこれを嵐の前の静けさと捉えるか事後と捉えるか次第で心の持ちようは変わっていくのだが、少なくとも今の公輔は後者特有の落ち着きを得れたようで、大きく深呼吸をして周りを一望した。

(……綺麗な人だつたなあ)

1人になつたことで、少しだけ考える時間が出来た公輔。その時間を自らの心を落ち着かせる為に使うと、暫くして冷静になることに成功し、それと同時に自身を連行した女の姿を思い出していた。

棚引く長い銀髪。

眉目秀麗な顔つき。

(白石みたいな人だったし……優しい人なの、かも?)

先程までの恐怖的な絵面は兎も角、出会った時の朗らかな笑み、優しさからかお茶を用意してくれるという親切さ。座布団まで用意してくれるという好待遇ぶりに公輔の心は揺さぶられていた。勿論、唐突に家に連れ込まれたのは不信感極まりない行為ではあるのだが、その割に引つ張る手や一つ一つの動作は朗らかで、それでいて優しい。

そんな女の行為を思い出し、何となく銀の髪をした女の人自身が思うような悪い人ではないのかなと思ひ始めたその瞬間。

「お待ちせ」

「びい!？」

唐突に声をかけられ、正座の状態から仰け反ってしまった公輔はバランスを崩し、後ろに倒れてしまう。

幸いにも、肘を着くほどの余裕はあったので後頭部を床に思い切りぶつけることはなかったものの、醜態を見せてしまったことにより、公輔の心音はまたしても上昇する。

「どしたの、そんなに仰け反って」

「(ぎ)めんなさい……」

「ああ、謝らないで。別に怒ってるわけじゃないから……ほら、見てよこのスマイル。

『あの人』とは大違いでしょ?」

「……それは、はい」

良く見れば、その表情に怒りの表情に怒りはなく、笑みが見えている。肝心の笑みも挑戦的だったり不審なそれではなく、温厚な笑み。

とは言いつつも、彼女が言った『あの人』というのが分からなかった公輔であつたため、比較対象も何もなかったのだが。

倒れてしまった状態から座り直した公輔は、差し出されたお茶を飲むように薦められ、ちびちびとお茶を飲む。乾いた口と喉が、少しだけ潤うとそれと同時に先程までバクついてきた心音が今一度落ち着きを見せる。

そんな自身の体調に安堵した公輔。『ほっ』と擬音が付くように息を吐くと、それと同時に開いた目から彼女が依然として笑みを見せているのに気が付いた。

崩れぬ笑み。それも、優しい笑みに逆に不審に思つた公輔だったが、その不審感は彼女の一言により、不意に霧散する。

「でも、そつか。やつぱりキミは……」

「な……なんですか？」

目を開き、薄目で公輔を見る女は銀系のような艶やかな髪をしており、顔立ちも娘である紬と瓜二つ。

連れ込まれた部屋は、見覚えのない部屋。本来の公輔ならば警戒心を解かずじただ

ろう。それでも公輔がややその緊張を解くことができたのは差し出された麦茶と見たことのある彼女の風貌にあつた。

しかし、それだけで完全にリラックスできるとまではいかず、上擦った声で公輔はその一言の真意を尋ねる。

すると、彼女は自らの胸の前でパン！と手を合わせた後に挑戦的な笑みを浮かべて一言。

「実はね、あの人に話を聞いた時から思ってたの……藤宮公輔君」

その言葉に、公輔はコクリと息を呑む。

この女から何を発せられるのか。難癖を付けられるのか、もしくは誘拐されてしまうのか。

彼女の口の開き、一挙一動に注目するために目を見開く。

女の口が開く。

そして、今度は聴覚すらも研ぎ澄まそうと集中力を上げたその瞬間。

「髪を切れば、イケメンになるって！」

公輔の、時間が止まった。

かみ？

カミ??

神

紙

???????

公輔の中で果てしないハットマークが浮かび上がり、その表情と動きを止める。

考え過ぎた頭は、やがてショートし脳内も思考停止の状態に至る。

今、公輔が分かっていることといえは己の視界の中で麦茶を入れてくれた女がドヤ顔で己の髪を手でチヨキチヨキと弄っていることのみであった。

「良いかな、公輔君……キミには華があるの！端正な顔立ちに、素養のある姿！これで

自信なさげな背丈と髪さえ正してしまえば和服姿がお似合いの立派な殿方になる……否、なれるっていう華が!!」

「……………」

意味が分からないし、笑えない。

まさに理解不能といった様子で、公輔は固まっていた。

いきなり髪を切ればイケメンになると言われ、あまつさえドヤ顔で色々言ってきたのだ。

言葉の一つ一つを掻い摘んでいけば何となく理解は出来るだろう。しかし、それをするための脳内も、今は女の突飛な発言により失ってしまっていたのだ。

そんな少年の様子に、やや女は不満げ。

公輔がフリーズしていることに気が付くと、その端正な口を尖らせる。

「む、思考停止してるな……なら身体で分からせる必要があるね!!」

「ひ、ひいつ!?!」

正座をしながらにじり寄ってくる女に、公輔はようやく思考回路を正常に戻す。しかし、時は既に遅し、目の前までにじり寄る女は公輔を輝くものを見るような羨望の眼差しで見遣った。

無論、そんな目で見られたこともなければ、そもそもこの状況でこんな視線を向けら

れることがおかしいと考えていた公輔は浴びせられる視線から目を背ける。この状況がおかしいということに、公輔は気がついていたので。

「だ、大体話を聞いただけで髪を切るなんて発想には至らないでしょう!? 一体何の情報で……」

「実はあの人……琥珀さんが貴方と話しているのを見たのよ」

「き……聴いてたんですか!？」

「えーつと。そう、キャッチセールス! 流石にあの人が悪質セールスマン扱いされてたのは笑ったなあ。まあ、呉服店営んでるからあながち間違えてはいないんだけどね……あ、お店は大丈夫だからね。ちゃんとした、由緒ある呉服屋さんだから」

「う……忘れてください!」

黒歴史を言い当てられたことでまたしても羞恥で顔を赤く染め上げる少年。それと同時に、何故自身が呉服屋に連れていかれたということを知っているのか、そのことを疑問に感じていると、『あつ』という間抜けな声と共に彼女が真顔で一言。

「ごめんごめん。流石に唐突が過ぎたよね……私の名前は白石^{しらいしりんず}綸子、キミを呉服屋に連れてきてくれた女の子のお母さんやってます。以後よろしく」

「しら……ええ!？」

「むふふー、驚いた? ねえ今どんな気持ち? 仲良くしようとして色んな話題を提供してるけ

どそつぽ向かれちゃつてる女の子のお母さんに連行されて、どんな気持ち？」

今度は悪戯つぽく目を細めて笑う彼女改め綸子はまさに愉快犯のように口を笑みで歪ませる。

そして、公輔が最も驚いたのは自分が学校でたまに白石紬という女の子に話しかけて、あわよくば仲良くなるうという目論見を完全に読まれているということだった。

凶星を言い当てられ、自分の全てを見透かされているように感じた公輔は更に羞恥の念を心に増幅させ、正常な判断を失う。

今の公輔の頭の中はしつちやかめつちやかになつてしまつていたのだ。

「まあ、連行したのにはれつきとした理由があるんだけどね。公輔君と実際に話してみたいって思ったからこうして話しかけて……こう、なんだ。ぎゅーん！つて来るものがあつたの。分かる？この気持ち」

「そ……そんなの知りませんしっ！」

それでも、何とか言葉を返すことはできたらしく。

綸子の問いかけに何とか強気で答えた公輔だったが、その顔の紅潮度合いは最早綸子の格好の餌であり。

そんな状況を先程から覗き見ていた一人の男が、遂に襖を開いて歩き出した。

「綸子」

「……あれ、琥珀くん」

歳の割に髭を生やさず、若い雰囲気が見えるもののその伸びた背筋と程よく鍛えられた肉體、そして彼のアイデンティティとも言える鋭い三白眼から織り成す雰囲気は厳格な雰囲気を醸し出している。

そんな雰囲気を纏ったまま、かつて公輔と友達の契りを交わした琥珀は公輔の前に降り立ち、綸子の目の前で正座を敢行する。

「公輔くんをめとにするばかにするんは止めんかい」

「しゃーらつぶ。このような素晴らしい素養をお持ちの子供のことを一言も紹介しなかったケチな琥珀くんに話すことなんてなんにもありません」

「いじつかしいげんてうるさい。お前に公輔君のこと教えとつたら公輔君めとにするんにはかにするのがっぱになる。一所懸命になるやろうが」

「馬鹿になんてしないわよ、それこそ馬鹿馬鹿しいつ。私はうら若き子達の人生や恋路を応援したいだけ……そう、所謂愉快犯なの！」

「……わらびしいやつちやなあ大人気ない奴だなあ」

懲りずに持論を展開し、身振り手振りで熱い思いを吐露する綸子に、琥珀は大きなため息を吐く。

たまに一人娘の教育方針的な何かで喧嘩をすることがある2人ではあるが、今回の綸

子の熱さはその時並の熱量を誇っている。

そして、決まって琥珀が折れ綸子が勝つのだが今回もその例に漏れることはなく。

「あつそ。じゃあ琥珀くんは見てるだけで良いわよ。私がこの子の髪から身体まで、全部ケアするから」

「だらぶちばかたれ、それとこれとは話が違うげん」

かかあ天下とはよく言ったものなのか。

折れた琥珀は己の持っていた袋からハサミを取り出した。

それは、先程まで公輔の味方を琥珀の寝返りを表しており。

かつて歴史の授業で習った東西の大合戦並の裏切りに公輔の開いた口は閉じること
はなかった。

「な、んで。白石さん……」

「どつちや？」

「アンタだよつ！」

琥珀のポーカーフェイスからのすつとぼけに今日一番の怒声を上げるものの、状況は
変わることなく。

綸子が辛そうな顔をしながら首を横に振ると、琥珀からハサミを受け取り一言。

「公輔君、これは逃れられないものなの。いわば通過儀礼……そう！昔の人が元服す

るのと同じこと！」

「綸子、それは多分違う……………」

「黙れ」

笑顔で発せられた綸子の一言に、おう……………と琥珀が仰け反り、1歩後ずさる。

それとは真逆に、公輔に向かって1歩ずつにじみ寄る綸子。気迫、執念にも似たそのオーラは計らずも公輔のクソザコメンタルを地の果てまで陥れた。

「さあ……………から先は戦争よ。生きるか、死ぬか……………選択しなさい！」

言うが否やゆつくりと伸ばされた綸子の右手。その手は公輔にとっては恐怖そのものの。

その恐怖に進んで触れたがる程DMでは無い公輔は、その手を躲すために1歩後ずさった。

「はっはっは、綸子……………お前も嫌われたもんやな」

「むう……………別に取って食いやしないのに」

ぶーぶーと口を尖らせる綸子。

それを見た琥珀は綸子を窘める為肩に手を置くと、ニヤリと笑みを見せる。

「綸子、仮に髪を切るにしたって順番があるげん」

「順番？」

「切るより先に髪濡らさんと」

「ああ、水攻めね」

その言葉を聴いた瞬間、もう公輔は我慢出来なかつた。

立膝をつき、立ち上がり、畳部屋だということも気にせず襖に向かって走り出す。

呆氣に取られる2人。

追いかけて来ない様を見て、脱出に成功したのかと悟った瞬間。

「朝から何しとるん……ふあ」

例によって、こういう時に限って邪魔は発生してしまうもので。

公輔が襖を開ける前に、紬が襖を開き2人が対面する。

寝起きなのか、眠そうに目を細め右手で目を少しだけ擦った彼女。

着崩れをおこし、左肩がズレているには気がつくことなく、寝ぼけ眼のまま公輔を見やった。

「……藤宮、ですか？」

そして、一言。

何時もの1歩距離を取ったような冷たい声色ではなく、まだ温かみのあるゆつたりとした語調に公輔は逃げることも忘れて、紬の目を見つめる。

綺麗な髪に、長い睫毛と普段より二割増で柔らかい目付きになった紬に、返す言葉は見当たらず。公輔は目線を右往左往させ、『あー……』となんの意味もない言葉を発してしまった。

そんな公輔の様子を見たからか、紬はクスリと笑みを見せる。

「おはようございませす……良い天気ですね」

「う、うん。良い天気だ」

「そう思いますか。本当に穏やかで……ふあ」

言葉の途中で、小さく欠伸をする紬。

何時もの紬には見られない気の抜けた表情に、可愛いと直感的に感じた公輔は不意に紬の表情が固まったことに気が付く。

何が起きたのだろうか、眉を顰めて紬の一举一動を見遣るべく目を細める。すると、それと真逆に行くように紬は公輔の目を見つめていた眼を見開き、顔を青ざめさせた。

「……藤宮？」

そして、己の姿を思い浮かべたからか。急いで紬は自分の寝癖を直すべく左手で跳ねた髪の毛を抑え、その後ろに気が付いた肩の着崩れを治すために右手で肩の着崩れを直すとうと衣服の肩部分を引っ張りあげる。

しかし、寝癖はそれだけで抑えることも出来ず。左手を離れた瞬間に抑えた寝癖はも

う一度ぴよんと跳ね上がってしまった。

その結果、公輔の目の前に出来上がったのはアホ毛のような寝癖を付けながら、浴衣の肩付近を抑えて涙目で睨みつける一人の女の子であった。

「……」

睨みつける紬。

無言の圧力に苛まされた公輔。

この空気が耐えられなくなってしまった少年は、何時も話しかける時のようにやさしく笑みを見せる。

しかし、その笑みは逆効果だったのか。紬は顔を俯かせ、肩を上下させる。

そんな様子に思わず心配してしまった公輔が声をかけようと手を伸ばすと、紬がぼつりと言。

「……や」

「え」

その一言を尋ねるまでもない。

気がつけば公輔の懐には紬がいて、その姿は既に右手を振りかぶっている状態。

紬を目にした途端警戒心が100から0になった公輔にその動きを防ぐことは出来ず。

「いやああああ!!!」

本当の敵は白石家の一人娘にあったのだろう。

手痛い一発が公輔の頬を襲うと、その威力に公輔の身体が横に吹っ飛ぶ。

傍から見れば案件物のそれでしかないが、この場合公輔が叩かれるのは至極当然のことだろう。

当たり前だ。

状況を全く知らない女の子がドアを開けると、そこには以前助けて、それ以降やけに慕われることの多くなってしまう男の子が居たのだから。

無警戒の状態でこんな場面に出くわしてしまえば、防衛反応で手が出てもおかしくはないだろう。それは公輔もなんと分かってはいた。

しかし、それを理解するのと実際にダメージを食らうのではまた違う。

予想外の手痛い一発に、公輔は思わず横に吹っ飛びうつ伏せに突っ伏してしまったのだった。

「馬鹿なのですか!?!馬鹿なのですか貴方は!?!」

「(バ、バ)めんなさい……」

罵声を浴びせる袖。

その声を聴き、己の浅はかな行為を悔やむ公輔。

その後悔は、一瞬。それより先にやらねばならないことがあったことに気が付いたのだ。

それは、先程まで行おうとしていた敵前逃亡という敗退行為にも近いそれ。しかし、それに気が付くのはあまりにも遅く。

気がつけば公輔の周りには3人の白石が、藤宮を囲んでいた。

「観念しまっし……藤宮君」

「両親に許可は頂いてるわ……させて頂きましょう、藤宮公輔改造計画！」

「え……お父さん、お母さん、本当に何しとるん？」

琥珀、綸子、紬の包囲網に打ち勝つ術をよそ者公輔は何一つ知らない。

故に逃げることは出来ない。

力でも、頭脳でも、数でも劣る公輔に、これ以上の抵抗は難しく。

「な、なんで許可を……誰か助けて!!」

大袈裟に助けを求めた割には、優しく、手厚く、プラスアルファ無料で、公輔の髪はバツサリと切られてしまう。

その後、学校のトイレで鏡を見た公輔は己の髪が面白い程に変貌している様を見て、静かに項垂れた。

見ず知らずの両親に許可を貰い、即実行に移してしまえる白石家の出足の速さに、文

句を言う気力すらも失ってしまったのだ。

しかし、その出来事が公輔にとつての転機となり得たのか。

それ以来公輔は吹っ切れたかのようにクラスの友達と話すようになった。髪の毛の話から始まり、クラスメイト達と楽しく話せるようになったのだ。

勿論、自らが望んだことではなかったのだが結果的にはそれが功を奏したのか。公輔は、これを機に明るい性格を取り戻すことに成功した。

石川の土地に順応し、かつて少女が放った『己が心を閉ざさなければ、きっとその気持ちに皆は応えてくれる』という一声を、実感することが出来たのだった。

『また貴方ですか、藤宮』

『ああ、また来ちゃった……という訳で白石。少しだけお話ししない？』

『……なんなん』

尤も、幾ら友達が増えようが彼が昼休みに取る行動というものは何一つ変わらなかった訳なのだが。

※

「往々にして、不器用な子です」

時は現在——綸子と公輔の初邂逅から5年後。

あの時と同じ場所で、綸子はそう言うと言程まで公輔が着ていた黒の着物を綺麗に折り畳む。

紬の実母、呉服屋の一人娘としての立ち居振る舞いを教えこまれ、着物に慣れ親しむことの多かつた綸子はこの手のことは非常に得意であり、そのしやんと伸びた背筋から織り成す華麗な手さばきに、公輔は紬と同じようなものをダブらせた。

「思いを素直に吐き出すことが出来ません。自己評価が低く、本当の自分をさらけだす事に抵抗があります……故に、公輔君に思ってもないようなことを照れ隠しに言ったりといった早とちりも幾許か」

着物を畳み終えた綸子が公輔を見つめる。全てを見通してしまふかのような達観的に細められた目付きが公輔を襲う。その視線はまるでこれから返される公輔の答えを既に予見しているかのよう。

柔らかく微笑んだ綸子は、一言。

「それでも、公輔君は紬が好きなのですか？」

公輔の意思を試すように細められた綸子の目は、傍から見れば恐怖そのもの。その眼差しとリンクして更に対象を恐怖に貶めるであろう重みを感じる語調からの一言は、以前の少年なら確実に恐れ戦き、その小さな身体をガタガタと踊らせていただろう。

しかし、白石紬という少女が幼年期から少しずつ前へと突き進み己を変えていくように、藤宮公輔という少年も幼年期から少しずつ前へと進んでいる。

綸子の細められた眼に写る『青年』は、その質問に微笑み、綸子を曇りのない真っ直ぐな眼差しで見つめた。

「はっ」

想っている。

紬の綺麗に柵引く髪も。

誰かの為を想う清廉潔白な心も。

それでも、自分のことになると途端に心が弱くなるいじらしさも。

公輔の目の奥では、紬のどんなどころでも長所にすら見えている。

だから、綸子のその言葉に躊躇うことは何一つなかった。

躊躇うことなき一言に、紬に対しての想いを全て凝縮させて綸子に放ったのだ。

「俺は、絶対紬が好きです。この恋を、叶えたいとも思うし……何より、きつとダメだった時は暫くは立ち直れないかも、ですね」

ここで少し、公輔は乾いた笑い声を上げて項垂れる。笑い声こそ器用に出してはいるものの、その顔はにこやかとは程遠い引き攣った笑みを浮かべている。

しかし、その顔を今一度引き締まった顔つきに戻すと、公輔は続けた。

「でも、言わなきゃ始まらない。書かなきゃ始まらない。自分が素直にならなきゃ、想いを実らせることも出来ないっしょ？」

紬との生活を送り、公輔は知っていた。

想いは伝えなければ意味が無いということ。

伝えなければ、勘違いされても文句は言えないこと。

そして、紬と向き合うためには己が正直にならないといけないということを。

日記の1件で、その想いはより強まった。現在は割と後悔している、というのが公輔が昨日書き綴った日記のたまかな流れである。

公輔の一大決心にも似た一言を聴いた綸子は、公輔に向けていた鋭い目付きを緩和さ

せ、くすりと笑みを見せる。

その姿に、最早恐怖はなく。既に普段の公輔が知り得ている綸子らしい悪戯っぽい笑みは張り詰めていた空間を一気に弛緩させた。

「……あーもう。妬げちゃう程真面目だなあ、公輔君ったら」

「寧ろ真面目じゃなきゃ紬は取り合ってくれませんから」

引き攣った笑みを見せ、そう言う公輔。

それを見た綸子は、ニヤリと口元を歪ませた。

「つむつむーって言っているのにな？」

「そういった生活にそういう刺激が必要って言ったのはあなた達じゃないですか」

「言われたから言っちゃうの？それってつまり好かれたいから言いなりになったと

……やだもう公輔くんったら大胆〜♪」

「もうやだこの人」

この世の中に天性のドMホイホイが存在するとするのならはこの人なのだろうと悟り、公輔は大きく項垂れた。

分かっていても、理解していても最終的にはこの女に一本取られてしまうのだ。

己の快樂のためなら家族すらも手玉に取ることも少なくはないこの女に、公輔は半ば尊敬の念を感じ、それと同じくらい諦観の念を感じている。

それは、最早この人には敵わないという降伏の意思。

小学生時代から抱いている、諦めの感情だった。

「嘘よ、嘘……公輔君ならきつと紬とお付き合ひ。出来ると思うわ。それに、私としても吝かではないし」

「ぐっ……ま、まだ分からないし。吝かとか言われても知りませんから。それにあれから1度も明確な返答が来てないんですよ？というか忘れられてるんですよ、俺の日記帳を。意識すらもされてないんですよ、これは」

現にあれからというもの紬は公輔に対して明確な返答をしていない。あたかも忘れてしまったかのような普段通りの素振りで公輔と共に学校生活を送り、帰宅し、たまに一緒に甘味を食べに行き、バイトで店番をしている紬に会う。

変わり映えのないこの光景を変えるだけの効果はあの日記帳にはなかったらしく、何処か安堵のような気持ちを抱きつつ、関係が進展しないことに関してやきもきする気持ちを抱くという面倒な心情で公輔は日々を過ごしていた。

そんな気持ちから発せられたのはあまりにも弱気な発言。しかし、そんな言葉を公輔の目の前で正座をする綾子はそんな言葉を即断即決で断ち切る。

「いえいえ、そんなことはないでしょう。ちよつとしたサインに公輔君が気付けないだけよ……ほら、公輔君って自分に対して相当な無頓着だし」

「よ、よく言いますよね！以前綸子さんにそういうの吹き込まれて、それを確認したら紬にめちやくちや怒られたんですからね!?!なあにが『つむつむつて呼ばれることに憧れと快樂を見出している』ですか！まるつきり嘘だったじゃないですか！嘘つき！綸子さんの嘘つき！」

公輔がそう言つて、綸子に食つてかかるものの彼女はそれらを気にすることなくため息を吐く。

その様子に、公輔が眉を潜めると彼女はおどけるように肩を竦めた。

「そこが無頓着つて言つてるのよ。大体、紬は興味のないことや物、人に対して怒りもしないし、それこそ蔑んで己から自然と離れていくでしょう。それをしないということ、つまり？」

己の人差し指を頬にくつつけながらそう言う綸子の表情に曇りはなく。寧ろ悪戯っぽく微笑んでいるであろうその表情に公輔は気付くことは無かった。

しかし、それにはれつきとした理由が存在し、質問の内容をまともに考えていた公輔は己の抱いた答えを発するために口を開いた。

「……まだまだ、脈アリだと？」

その答えは、公輔にとっては希望的観測にも近い回答。その答えに根拠はなく、紬がどう思っているのかも定かではない。

しかし、綸子にとってはその答えは満点にも近い回答らしく、その悪戯っぽい笑みを見せたまま頬にくっつけていた人差し指を離し、ちゅちゅちゅ……と指を横に振って見せた。

「公輔君、貴方の鼻根のチームの応援歌にもあつたじゃない……『生み出せ チャンスを♪』って。自分から離れるようなことがあつてはダメ。押して、押して、押しまくって細のことは知るの。そして、隠れたサインに気がつくの！」

「り、綸子さん……」

天啓を得たかのように目を見開く公輔に、最早迷いは無かった。

公輔にとつて、今の綸子の一言程頼もしい言葉はなく、その言葉に公輔の瞳は輝き、明朗快活なその姿を取り戻す。

「公輔君、貴方はやれば出来るわ！」

最後に一声。

公輔の扱いを心得ている、マスター綸子は両手を広げて公輔を見据える。そして、その声に応じないほど今の公輔は薄情で淡泊な性格ではない。

「うすー！一生付いていきます!!」

お互い利き腕の拳を突き出し『うえーい』と言いながらコツンと小気味の良い音を立てると、2人して笑い声を上げる。

普段、弄ばれることの多い公輔ではあるものの、世話になっており、また愉快犯以外には特筆すべき悪癖も見つからない紬の母のことを人間として尊敬している公輔。

人としても尊敬するところの多い彼女との会話を心の底から楽しんでいて、というのは2人の様子を見れば明白であった。

「……何をしておられるのですか？」

尚も、紬の可愛さを語る『つむつむ談義』を良い時間になるまで駄弁っていると不意に襖が開く。

そこには、先程まで話題に挙がっていた女の子がその背筋を伸ばした高貴な様で屹立しており、その様に2人は思わず彼女に視線を送った。

長い髪に、睫毛。常日頃から手入れを怠っていないのか健康的で艶のある肌はまさに可愛いの種類に入る。そんな様を見て、今一度公輔と綸子は顔を見合わせる。

「ほら見なさいよ公輔君。紬の魅力はあの長く艶のあるロングヘアーよ。あれをポニテなんかにしてみなさい、ポニテ萌えの公輔君なんか悩殺よ、のーさつ」

「勝手に性癖付け加えんのやめてよね。後、紬の魅力は清廉潔白な心にありますから……ま、まあ。髪の毛とか睫毛とかも可愛いですけど。可愛いが過ぎますけどっ」

「……先程から何の目的があつてそのようなことを話してるのかは知りませんが、人の外見や内面を唐突に褒めるのはやめてくださいまし」

開幕早々外見を2人に褒められた紬は、その白い肌を朱に染めつつも辛辣な言葉を送り、公輔に至つては鋭い眼差しで睨み付けた。

睨み付けられた公輔はたまつたものではない。激おこの紬は可愛いものがあるが、何も積極的に怒らせたり、そういうことで気を引きたい小学生ではない。

何時だつて公輔は紬には笑つていて欲しいし、穏やかでいて欲しいのだ。

「で、どうしたの紬。もしかして公輔君と何を話してるのか気になつちやつた？」

話題転換をしようと、両手を胸の前で叩きそう言つた綸子。その声を聴いた紬は先程までの辛辣な目付きを1度和らげ、今度は己の母を見て一言。

「……気になるのはこんな朝から公輔がこの部屋に居ることです。公輔、何故ここに？」

朝は往々にして気が抜けてしまう場ではあるのだが、今回の紬にはそのきらいは全くなく、寧ろ以前より2割増で気を張っていた。

紺を基調とした女子用制服に身を包み、既に手提げ鞆も用意している紬。明るめの色

をした髪とその制服の色は真反対にも近く、清廉潔白な佇まいも相まって紬の周りには気品にも似たオーラに満ちていた。

そんな紬の発した一言に、正座をしていた公輔はその理由を話すべく紬の顔を見て正直に打ち明ける。

「綸子さんに和服を着ると頼まれて。なんか写真パシヤパシヤ撮られてたんだけど……」

「趣味でーす♪」

「おい、今なんて言った」

「2人の成長記録をパシヤつと撮るのが生きがいなの」

「何でアンタが俺の成長記録を取るんだよ……」

非情な綸子の宣告に公輔は項垂れる。いきなり始めて髪を切られた時のように『来まつし』と言われ、為す術もなく付いていった公輔。特に要件を言われることも無く差し出された着物を指示されるままに着ていたらこんなことになってしまったのだ。

自業自得と言えばそこまでである。しかし、それだけでは公輔は納得できなかった。割り切れない思いと同時に項垂れた頭はまさに負とも形容できるオーラが漂い、紬とはまるで正反対。

そんな正反対とも取れる光景を見たからか、綸子はクスリと笑みを見せて、紬の方を

見る。

「そんなに固くならなくなつていいのに。公輔君は最早家族みたいなもの、ポンコツを取り繕つたつて今更よ、今更」

「誰がポンコツですか、誰が……友人とはいえ、客人が家に居る状態で寛ぐ人間が何処にいますようか」

「そこにいるじゃない。目の前の、可愛い女の子が」

「お父さんには、礼儀を忘れるべからずと言われていきますので」

「ああ、パパの話ね……へっ」

「何故鼻で笑うのですか」

琥珀とは違い、何方かと言えば綸子は奔放な性格が先行する綸子。

普段こそ和服の似合う日本美人と形容するに相応しい格好と作法、そして身のこなしを魅せるもののそれは彼女の本性ではない。

綺麗な薔薇には刺があるというのがまさに彼女のイメージであろう。

彼女に近い人物は往々にして、綸子の本性であるところの奔放さ、笑顔の俣に発せられる辛辣な言葉、そして愉快犯つぷりを隠されることは無い。

そんな綸子に紂は反抗の意を込めて、綸子と同じ方言抜き言葉で果敢に噛み付くもの、依然として綸子に言葉で勝てたことはなし。

彼女にとっては最愛の娘の怒りでさえ、3時のおやつなのだ。

「さて、取り敢えずこのカッコイイが過ぎる写真は鳥取のお友達に送るとして」

「サラッととんでもないこと言うの本当にやめてくれませんかね。見知らぬ人に俺の写真を送らないでくさいっての」

「だってキミと紬の話を少女漫画風に話したら興味深げに目を輝かせてたその子の娘がいたんだもの。鳥取は私の地元だしお土産とお話位はしないと」

「俺の個人情報はお土産扱いかよ……」

項垂れて、ため息を吐く公輔ではあったがその表情は陰鬱ではなく、寧ろこの状況を楽しんでいるかのように苦笑いを浮かべていた。

紬と会話して、琥珀と好きなことで話をして、綸子に弄られる、その生活は公輔の日常の一部になっている。

そんな、数年前では起こり得ることすら想像出来なかった光景は、公輔の心を弾ませている。

畢竟、公輔はこの生活を楽しむことができている。それ即ち、初めに言われた紬の一言は間違いではなかったということ。

己が真摯に向き合えば、人は応えてくれる。

そんなことを言ってくれた女の子がいるという事実には、喜びの感情を抱くのと同時

に、あの時公園で泣きじやくつてなかつたら……なんてなんとも情けないことを考えているのが、藤宮公輔という青年のマイナスポイントではあるのだが。

「さあ、要件は済んだしそろそろ学校へ行かなきゃね」

障子の隙間から光が差し込む。その光景と、制服姿の紬がやって来たという事実、縷子はそろそろ公輔達が学校に行く時間だということに悟る。

発せられた言葉に公輔は目を見開き、時計を見るべくきよろきよろと辺りを見渡すも、その動きは紬により止まり、代わりに紬が公輔に腕時計を見せることで、現在時刻を示した。

「8時です。まあ、今から行けば間に合う距離ですので心配はしなくてもよろしいかと」
「そっかあ……ふう。縷子さんと話しているとペースに飲み込まれて時間を忘れちゃうからさ」

よし、と伸びをして正座の体勢から凝り固まった身体を解した公輔。

何時もの明朗快活を絵に描いたようなニコリとした笑みを紬に向けると、外に出るべく歩を進めた。

「さて、そろそろ行くっつか紬」

「……公輔」

しかし、その動きすらも紬に止められる。

一体なんだと再度紬の方を振り向いた公輔。

その男の心拍数が一瞬跳ね上がったのは、眉目秀麗な少女の顔が目と鼻の先にいたからであろう。

「ボタンが外れています。じつとしてくださいまし」

悪戦苦闘することはなく、目すらも瞑りながら容易に公輔のボタンを留めていく紬。

そして、ボタンを全て留め終わると先程の余裕を絵に描いたような無表情が一転、眉を吊り上げた紬が公輔に一言。

「貴方はもう少し着こなしに気を配ってください。何時も何処かしら不備があるのは如何なものかと」

そう言つて、今度は己の服装に気を遣い腕付近の埃を払う素振りを見せる。

それを見た公輔は、流星に怒つているという状況を悟つたのか、『ごめん』と謝りつづ言い訳を並べた。

「昔つから紬が直してくれるから癖が付いちやつたんだよ……いつもありがとな」

さりげなく、感謝も忘れずに挟む公輔。

その気遣いに一瞬、紬は気を緩め『構いません』と笑顔で言おうと口を開くものの、その口を咄嗟に噤んで、思いつきり両手で頬を叩いた。

そして、悶絶。

「……痛い」

「何をしてるんだい、折角の綺麗な肌を」

対象の気持ちを悟ることをせずに、さり気なく呟いた公輔の一言。

それは紬に対しては愚策だったのか。公輔の心配とは裏腹に目を見開いた紬は、心配そうな顔つきで自身を見つめる公輔に、言葉で噛み付いた。

「黙ってください……この前も、それより前も、何度も何度もボタンが外れているのを見えています。もしかして、貴方は慣れない学ランのボタンに悪戦苦闘している私を見て愉しんでいる愉快犯なのですか？」

尤も、悪戦苦闘していたのは公輔が中学1年生の1学期の期間のみだったのだが。

中学から学ランを着ていた公輔は、その堅苦しさから学校に辿り着くまで制服を着崩す癖があった。

そんな公輔を咎めたのが中学生になり、公輔と辛うじて友人と言える間柄となった紬であった。

当時は、堅苦しい服は嫌う癖に人に対しては堅苦しさ前回の公輔。そんな当時の公輔にとつて紬の服装点検は日常の1部と化していた。

しかし、悪戦苦闘していた期間など紬には関係なし。彼女が今、1番腹に据えかねている理由は学ランのボタンを何度も何度も付けさせられている公輔の不手際にあるの

だから。

息を一つ吐く。それと同時に肩の力を抜いた公輔は紬を見て、軽く頭を下げた。

「ごめん……白石」

この言葉に誰かがツツコミを入れたとしたら、間違いなく『気でも狂ったか?』と心配されるだろう。そんな一言を公輔は発する。

普段から、紬、つむ、つむつむと幅広い名称を呼ぶことで紬の響感を買ってきた公輔。その渾名の安直さにどれだけ紬から怒られてきたのかは、公輔にしか知り得ないことであらう。

そんな公輔が、紬を『白石』と呼んだ。

これは、今の公輔からは想像することも出来ない、まだ石川という土地に慣れていなかった臆病な公輔が紬に対して使っていた名称。その堅苦しさバリバリの呼び名は、公輔が完全にこの土地に慣れ、紬の父を白石さんから琥珀さんと呼び名を変えるまで続いた。

今となつてはRどころか、SSRの希少価値となった公輔の白石呼び。

そんな公輔のSSRプレイにいつもの気安さではない、小・中学時代の堅苦しさを感じた紬。

彼女とて鬼ではない、先程の一言で今の公輔の持ち味とも取れる明るさが損なわれてしまったのかと考えた紬は、胸の前で手を振る。

「あ……いえ、私は別に構いませんが。私ばかりボタンをつけるのは些か不公平ではないのかと……」

「いや、だからと言つて今の状況に甘えるのは良くなかった。もう少し紬の負担を考慮すべきだったし」

「ふ……別に、うちは負担だなんて思つてません。ですがこのままだと……」

あなたがボタンを付けられない人になってしまう。

そんな心配から、一言を発しようとした瞬間、公輔はニヤリと笑みを見せて、一言。

「けど、俺は『紬』にボタンを直してもらつて幸せだ。俺の学ランのボタン留めてくれる紬半端ないつて。ボタンつけてる時の紬ったら上目遣いめっちゃするんだもん」

無論、これは公輔の本音であり嘘偽りはないのだが。

それにしてもあまりにも落として上げる公輔の余計な一言は先程の行為を謝ろうとした紬の心を面白いように弄び、撥り、怒りのボルテージを最高潮に達させたのだった。

「あ……貴方なんて大っ嫌いですッ!! そうやって何時もうちを弄んで……!!」

「んんっ……!!?」

涙目でそう訴えられた公輔はその可愛さに悶絶しかける。己の発言に問題があった

のは今の紬やクスクスどころか吹き出しそうになっている綸子を見れば一目瞭然の出来事であった。

しかし、そんな問題発言をしてしまった己が悪いということをつかっていたとしても、公輔はその言葉を言つて良かったと心底思う。

己が己の意思に真摯になることで、こんなに可愛い紬を見れる。その事実には味を締められた故である。

「ひっ……お腹、おなか……壊れる……!」

「そんなに笑わないでくださいよ。そこまで笑いますか普通」

そして、傍観者兼愉快犯はしゃがみこみ、腹を痙攣させながら笑い声を上げていた。

呼吸困難に陥つたのか『ひー、ひー』と笑い声を上げる綸子に、遠慮等の気遣いはゼロ。

その笑い声で如何に自分が羞恥的な行為を犯してしまったのか気が付いた紬は俯き、耳元を赤くしながらふるふると震え、公輔は綸子の笑い声に苦笑しながらため息を吐く。

ため息を吐くと幸せが逃げる、というのは良く言われる話ではあるが、今の公輔には隣で幸せを作ってくれる女の子が存在している。

幸せを吐き出しても、直ぐに俯いて震えている紬を見て幸せな気持ちになれるので、

全く気にすることなくため息を吐けるのだ。

しかし、人前でため息を吐くことはそれなりに失礼な行為に値することは周知の事実である。

羞恥の念に駆られつつも、公輔の無礼を逃さなかつた紬は、その綺麗な御御足で公輔の足を、華麗に踏み付けた。

先程までの苦笑いが嘘のように青ざめる公輔。

その光景を見た綸子は、今度は落ち着いた様子で言葉が続ける。

「ふすつ……ごめんごめん。それにしても紬だったら、そんな心にもないこと言っちゃつて。公輔君、紬は何時も公輔君のボタンを直してるからこれが日常の一部になつてるのよ」

「え、嘘……そうなの?」

「それはもう。何せ紬はボタンに快楽を見出し始めているんだから」

「それは嘘ですよ? 流石に騙されないよ?」

「それはどうか?」

「嘘だつて、確信してるから」

「……つーん、つままないの」

策士、綸子の一言は公輔によって見破られる。性格や態度をいじられ、ネタにされ続

ければ流石の公輔にも隙はなくなる。

嘘と本音を分別し、綸子の精神攻撃を見事に防ぐことに成功したのだ。

そう、『公輔は』防げたのだが。

「全く……綸子さんはこれだから油断出来ないんだよ。なあ紬、そんなの真つ赤な嘘でしょ？」

「……………」

「紬？」

先程までの怒りが嘘のように、1点のみを見つめる紬。その視線は公輔の学ランに向けられており、その様子をおかしいと感じた公輔は紬の目の前で手を振り、名前もといあだ名を連呼する。

「紬……おい、白石！つむ！つむつむー!？」

しかし、そんな呼び掛けにも紬は反応せず。何時もなら『つむつむ』と呼んだ時点で噛みつかれるであろうに、その一言にも反応出来ず。

彼女は、真面目な性格である。

故に、何かを言われてしまえばそれに關して考え込む。分かなければ、より深みに入ってしまう不器用さも彼女の魅力ではあるのだが。

「そんな訳ありません……うちがボタンに、快樂を見出すなんて、そのようなこと」「考え込むの!?!そこ、即断即決で言えないの!?!」

残念ながら、彼女の人となりを一審知っているのは家族である。

それ故に綸子はこう言ってしまうば紬があたふたするであろうということを分かっていた。

そんな娘に対しての理解から発せられた一言に、白石家最愛の一人娘は、疑心暗鬼状態に陥ってしまったのだった。

「つ、紬……大丈夫だって。ボタンに快樂を見出したところで変態なんて思わないから! 寧ろ来い! ドンと来い!」

「き、決めつけんといて!! うちはそんな……!!」

紬がひたすら考え込み、公輔が慌てふためく様を見た綸子は、その關係を微笑ましい様子で見つめながらも、かつて己の地元で彼等のような気軽さで話していた友を思い浮かべる。

同じ境遇で、苦勞もしながら共に支え合った竹馬の友に想いを馳せたのだ。

(……元氣かな)

彼女もまた、見知らぬ土地に順応することに時間のかかった人物であった。

己の地元から石川までは凡そ6時間。簡単に帰れるような距離ではない場所で暮らし、それ相応のストレスを抱えていた。

それでも彼女がこうして笑顔を絶やさず愉快犯をやれているのには、たったひとつの理由がある。

——そして、それは彼女や琥珀が公輔に与えたものと同じもの。

「と、いうわけで公輔君、これからも安心してボタンをずらしてくれて構わないから」

「……次から2つずらしてみようかな」

綸子の発した一言に、今度は興味本位で何となくそう言ってみる公輔。

そんな一言に、紬は張り付いた笑顔を向けてたった一言。

「ずらしてもらって結構です。私は2度とお締め致しませんので」

「許して」

そんな怒り心頭の紬の機嫌を直すのに、時間がかかってしまったのは言うまでもなく。結果として、文句を言いつつも同じ光景が見れるようになるまでに1週間はかかった

と言われている。

出会は人を変える。

人は人を変えてくれる。

琥珀と綸子が与え、紬と公輔が受け取ったものはこの先も受け継がれていく。

唯一無二の繋がりの大切さ、それが綸子が受け取ったものであり、彼女が公輔に与えたものなのだ。